経済と政治との関連の問題（六）

――いわゆる「トロツキズム」の性格規定――

山本二三丸

十九

以上みてきたように、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の創立と指導、「合法マルクス主義」および経済主義にたいする――そしてまた、ナロードニキ主義にたいする――闘争、ロシア社会民主労働党の綱領草案の作成という、レーニンが首尾一貫しておしすすめてきた実践活動はすべて、革命的前衛党の創設をめざしたものであって、そこには、真の前衛党のあり方が明確にうちだされている。こうした、いわばレーニンの党建設の理論が、マルクス・エンゲルスのうちたてた科学的社会主義の正確な把握とそれのロシアの現実への厳密な適用とにもとづいていること、さらにこの政治理論がロシア経済の的確な分析――『ロシアにおける資本主義の発展』――によって科学的に基礎づけられていることは、いまさらいうまでもなく、あきらかなところである。そして、これにくらべてトロツキーの唱えている「党建設の理論」なるものが、「党建設」どころではなく、徹頭徹尾解党主義者の主張と完全に一致し

たものであり、「自然成長性への拝跪」をけんめいにまもる経済主義者の後塵を拝する小ブル的俗物の思いつき以上には一歩も出るものではない、ということも、これまでの説明によって明白となった。党にかんするトロツキーの考え方がどういうものであるかは、以上のところですでに明白であるが、なお、その考え方の性格をあますところなくとらえておくために、さきにまとめた党にかんするトロツキーの考え方（(1)、(2)、(3)）について、つぎの二つの点を究明しておく必要があるとおもわれる。そのひとつは、「職業的革命家」にたいする非難と攻撃である。トロツキーは「職業的革命家」を構成するものは、「理論的に同意見の人々」である「社会主義的インテリゲンツィア」どもであって、彼らが「非合法の、秘密の党サークル」をつくって「指導権」を独りじめにし、労働者にたいして「組織的独裁」をしていると書きたて、こうした「大衆から浮きあがった職業的革命家」は一日も早く放逐して「職業的労働者」こそが党の中核を占めるべきだと、しきりに「平労働者」にけしかけているのである。いまひとつは、「職業的労働者」つまり、「平労働者」が中核となっている党の活動の重点は、ひたすら日常的「欲求」や目前の「経済的利益」を第一に考える「広範な、おくれた労働者大衆」を念頭において、彼らを党の影響下に――ついで党組織のなかに――ひきいれるために、もっぱら日常的「欲求」に応じたもの、つまり経済闘争に限定すべきであって、「政治的スローガン」や「一般的な綱領的要求」などけっして出してはならない、というものである。この二つは、たがいにむすびつきあっているもので、同じひとつの考え方を示している。そこで、つぎにこうした主張を、事実とつきあわしてみることにしよう。

まず、「職業的革命家」について。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ツァーリズムの残忍・野蛮な抑圧のもとで、革命的前衛党を指導した人々が、「職業的革命家」としてたたかったことは、はたして、誤りであったろうか

？　いったい、「職業的革命家」とは、どういう活動をした人々か？　そして、彼らは、トロツキーが断固主張しているように、即刻放逐されるべきもの、「職業的労働者」によってとってかわられるべきものであったろうか？　ここでも、われわれに判断の材料を提供してくれるのは、動かすことのできない歴史的事実である。この歴史的事実をただしくとらえたレーニン、もっともすぐれた「職業的革命家」であるレーニンそのひとの言葉を、つぎに引用してみよう。レーニンは、一九一九年三月十八日、全ロシア中央執行委員会特別会議の席上で、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）の輝やかしい指導者、スヴェルドロフを追悼する演説をおこなっているが、そのなかで、スヴェルドロフにたいし「最高度に鍛えあげられたタイプの職業的革命家」のもっともすぐれた模範だとして、最高の讃辞をおくっている。だが、この演説がわれわれにとって重要な意義をもっている理由は、そうした最大級の讃辞そのものにあるのではなく、むしろ、スヴェルドロフそのひとが体現している真の革命的指導者のあり方について、レーニンが適切な教訓をここからひきだしている点にある。その演説の冒頭で、レーニンはまず、「プロレタリア革命のもっとも本質的な特徴」と「プロレタリア革命の指導者」としてのスヴェルドロフとについて、つぎのように述べている。

「……同志スヴェルドロフは、わが革命の進展中に、そのかずかずの勝利のなかで、プロレタリア革命のもっとも主要なもっとも本質的な特徴を、他のだれよりも完全に、だれよりも整然と表現することができた。そしてプロレタリア革命の指導者としての彼の意義は、革命の事業にたいする彼の誠実な献身という点にあるよりもはるかにこの点にあるのである。

同志諸君！　皮相な判断をくだす人々の目には、わが革命の数多くの敵、あるいはいまにいたるまで革命とその敵との間を動揺している人々の目に、――これらの人々の目になによりもうつるのは、搾取者を、勤労人民の敵をきっ

ぱりと、無慈悲なほど断固として処断する点にあらわれた、革命の特徴である。この特徴がなかったならば、――革命的強力がなかったならば――プロレタリアートが勝利しえなかったであろうということは疑いもないが、しかしまた、革命的強力が、革命の発展の一定の時機にだけ、一定の特定の条件があるばあいにだけ、必要かつ正当な革命の手段だということ、これに反して、プロレタリア大衆の組織、勤労者の組織は、この革命のはるかに根深い、恒常的な本性であり、この革命の勝利の条件であったし、いまでもやはりそうである、ということもまた疑いない。この幾百万勤労者の組織にこそ、革命の最良の条件があり、その勝利のもっとも深い源があるのである。プロレタリア革命のこの特徴こそ、かつて革命中に見られたことのないこの特質――大衆の組織化をなににもまして体現するような指導者を、闘争のなかで生みだしたものである。プロレタリア革命のこの特徴こそ、ヤ・エム・スヴェルドロフのような、なによりもまず組織者であるような人物を生みだしたのである」（全集第四版、第二十九巻、七〇―七一ページ）。

ついで、レーニンは、スヴェルドロフの「すばらしい組織者としての本能が、長い闘争を通じて育てあげられたこと、プロレタリア革命のこの指導者が、革命家の活動のもっとも困難な活動条件のもとでさまざまな時代を経ることによって、偉大な革命家としての彼のすばらしい性格の一つ一つを自分で鍛えあげたものであること」を指摘して、彼スヴェルドロフがいかに「最高度に鍛えあげられたタイプの職業的革命家」であったかということを、つぎのように克明に説明している。

「まだまったく青年であった活動の初期に、彼は、政治意識をふかくいだくやいなや、すぐさま、完全に革命に身を捧げた。この時代、二十世紀のごく最初の時期に、同志スヴェルドロフはわれわれのまえにあらわれた。最高度に鍛えあげられたタイプの職業的革命家として――家族から、旧ブルジョア社会のあらゆる便益と習慣から、完全に手を

切った人物として、革命に全身全霊をささげた人間として、また長年のあいだ、監獄から流刑へ、流刑から監獄へとうつりながら、長い長い年月にわたって革命家を鍛えた性格を、身うちに鍛えあげた人物として、あらわれたのである。

しかし**この職業的革命家は、絶対に、一分間も大衆から離れはしなかった。**まさにツァーリズムの諸条件が、当時のあらゆる革命家にたいしてと同じように、彼にたいしても主として地下活動、非合法活動で働く運命を負わせたとしても、この地下活動、非合法活動のなかでも、同志スヴェルドロフは、ほかならぬこの二十世紀の初頭いらいインテリゲンツィア出身の前代の革命家にとって代るようになった先進的労働者とつねに肩をならべ、手をとりあって進んだのである。

まさにこの時期に先進的労働者は、何十、何百人となく活動へ加わり、また、大衆とのきわめてかたい結びつきとともに、それなしにはロシアのプロレタリアートの革命の成功はありえないような、革命闘争の鍛錬をつんできたのである。この非合法活動の長い道程こそ、たえず闘争に参加しながら、けっして大衆から離れなかった人物、けっしてロシアを捨てず、いつも労働者中の優秀な分子とともに行動し、そして追及によって革命家のうえに負わされた、生活からの隔絶にもかかわらず――労働者に愛される指導者に自分を育てあげるだけではなく、だれよりも広くだれよりも多く実際を知っている指導者に育てあげるだけではなく、先進的プロレタリアの組織者にも育てあげることのできた人物にとって、もっとも特徴的である。もし一部の人々が、非合法活動へのこの完全な没頭、職業的革命家のこの特徴が、彼を大衆からきりはなすかのように考えたとすれば、――われわれの敵、あるいは動揺している人々は、とかくこう考えがちであるが、――ほかならぬヤ・エム・スヴェルドロフの革命的活動の実例こそ、この考えがはな

はだしくまちがっていること、むしろ反対に、多くの監獄と僻遠のシベリアの流刑地とをわたりあるいた人々の生活が示しているような、革命事業へのかぎりない献身が、ほかならぬこの献身が、このような指導者を、わがプロレタリアートの華を、生みだしたことをわれわれに実証している。ところで、この献身だけが、素質と結びついたばあい、人を理解する能力、組織活動をうまくやっていく能力と結びついたばあいに、偉大な組織者を鍛えあげるのである。非合法のサークルを経て、革命的地下活動を経て、まただれもヤ・エム・スヴェルドロフほど完全に肉づけ、表現したもののない非合法の党を経て――この実践の学校を経てはじめて、この道をとおってはじめて、彼は最初の社会主義ソヴェト共和国における第一人者の地位に、広範なプロレタリア大衆の組織者のあいだの第一人者の地位につくことができたのである」（前出、七一―七三ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

みられるように、ツァーリズムの兇暴な弾圧のもとで、レーニンは、「家族から、旧ブルジョア社会のあらゆる便益と習慣から、完全に手を切り、革命に全身全霊をささげた」職業的革命家、「監獄から流刑へ、流刑から監獄へとわたりあるいた」職業的革命家、つねに警察・憲兵の追及におわれ、「地下活動、非合法活動で働く運命を負わせられた」職業的革命家だけが、この「非合法活動の長い道程」を背負ってその生涯を革命事業に捧げた職業的革命家だけがはじめて、「つねに労働者のうちの優秀な分子とともに活動する」指導者、「先進的労働者に愛される指導者」、「先進的プロレタリアの組織者」に、文字どおりの「プロレタリアートの華」になることができたのだ、[77]ということを、ヤ・エム・スヴェルドロフの実例をひいて、このうえもなく明快に説明している。そして、職業的革命家にたいして、それが「非合法活動、地下活動に完全に没頭」しているから、労働者大衆からすっかり切りはなされているのだとか、大衆から完全に浮きあがった、「非合法の秘密の独裁的グループ」にすぎないのだとかいったような、さま

ざまな非難や中傷にたいして、それは、「われわれの敵」つまりプロレタリア革命の敵のいつものやり方なのだと述べ、たとえそうでないとしても、それは動揺的な小ブル的俗物のやり方を出るものではないと、手きびしい批判を加えている。

(77) 「数十年のあいだ、監獄から流刑へ、流刑から監獄へとわたりあるき、つねに地下活動、非合法活動で働く運命を負わせられた」革命家だけが、「つねに労働者のうちの優秀な分子とともに活動することができ、先進的労働者に愛され、先進的労働者を何十、何百人となく前衛部隊の隊列にひきいれ組織することができる」真実の指導者になることができた、というレーニンの言葉ほど、われわれの心をうつものはない。あとで引用されるレーニンの文章が示しているように、苛烈きわまりない弾圧下での「革命事業へのかぎりない献身」こそが、「能力」と「素質」と「人間的力量」すべてを豊かに華ひらかせることができたのであろう。これにひきかえ、今日の泰平ムードのなかで、極上の背広、ホワイトカラーで高給とりの「革命家」が平和革命をぶってまわっている図は、まさにレーニンの教訓をふみにじるものというのほかないものであり、あわれみを越して憤激をひきおこすものでしかない。

レーニンは、「革命事業へのかぎりない献身だけ」が、「人を理解する能力、組織活動をうまくやっていく能力」と結びついたばあいに、偉大な組織者を鍛えあげたのだ、と述べている。すぐれた職業的革命家の隊列が、いずれもこうした「献身」と「能力」とを身につけた人物であることはいうまでもないが、そのうえになお、正しい革命的理論を的確に活用して正しい見透しをうちたてるすぐれた能力をも身につけていたことを見落すことはできない。そして、それゆえにこそ、これらの職業的革命家の隊伍が、ボリシェヴィキ党の中核となり、先進的労働者を何十、何百人となく革命的部隊のなかにひきいれ、労働者大衆と党とのきわめてかたい結びつきをうちたてることができ、それによってロシアのプロレタリアートの革命を勝利に導くことができたのである。こうしたすぐれた「プロレタリアー

トの華」である職業的革命家にたいして侮蔑と非難の言葉を――外国党の機関誌上に大々的に――書きたてている「革命家」トロツキーはどうかといえば、事実、彼は「理論」も「能力」も「革命事業へのかぎりない献身」ももちあわしていない野心的インテリとして、ヴィーンに亡命インテリ集団を組織するのが精いっぱいで、先進的労働者を「何十人」はおろか、ほんの数人すらもつかまえることはまったくできず、この野心的政治屋の組織した亡命インテリ集団は、――レーニンのいう「われわれの敵、もしくは動揺する小ブル的俗物」にふさわしく――たちまちのうちに「野垂れ死に」の運命におちいってしまった。それゆえ、トロツキーの職業的革命家にたいする非難と中傷は、「何十、何百人の先進的プロレタリアの隊伍を組織し指導しえたボリシェヴィキ党」にたいして、ひとりの先進的労働者もつかまえることのできなかった野心的政治屋の逆うらみの捨てぜりふであり、まさに駄犬の遠吠えの類でしかないのである。こうした下劣な「革命的」政治屋にくらべて、ボリシェヴィキの中核を形づくった職業的革命家たちが、どんなにくらべものにならないほどすぐれた人間的力量をそなえていたかということは、右につづくレーニンのつぎの文章が、これをあますところなくあきらかにしている。

「革命というような激烈なたたかいのなかでは、またあらゆる革命家のおかれている特殊な地位にあっては、たとえ小さな一委員会の活動でも論議になるならば、偉大な、闘争のなかでかちとられた、無条件に議論の余地のない威信、すなわちその力を、もちろん抽象的なモラルからではなく、革命的闘士のモラルから、革命的大衆の隊列のモラルから汲みとるところの威信が、絶大な意義をもつのである。

もしわれわれが、献身的な革命家の小さな一団のうえに襲いかかった、はかりしれない困難に、一年以上も耐えることができたとすれば、もし指導的な諸グループが、きわめて困難な諸問題を、あのように毅然として、あのように

すみやかに、あのように協力一致して解決することができたとすれば、それはもっぱら、彼らのあいだにヤコフ・ミハイロヴィチのように比類のない、有能な組織者が、傑出した地位をしめていたからにほかならない。……

偉大な革命がその闘争の過程で、偉大な人物を生み、以前にはとうてい不可能だとおもわれていたような才能を発揮させるということは、歴史がすでに早くから証明してきた。非合法サークルと地下活動の学校から、迫害された小政党とトゥルハンスクの監獄の学校から、このような組織者が生まれでようとはだれも信じないであろう。このような学校から、絶対に議論の余地のない威信をもつようになった組織者、ロシアにおける全ソヴェト権力の組織者、その知識の点で唯一の組織者、これらのソヴェトをうちたて、かつ実際にソヴェト権力を――いまその困難で、苦しい、血でひたされた進軍をしている、だがすべての国民にむかって、全世界のあらゆる国にわたって勝利の進軍をしているソヴェト権力を実現した党の活動の組織者が生まれでようとは、だれも信じないであろう。

この比類ない組織者としての才能をたくわえたこのような人物を、われわれはけっして他の人間に代えることはできない。……

しかしプロレタリア革命は、それが深い源をもっているからこそ強いのである。この革命が、自分の生命を献身的にささげ、この闘争に生命をかけた人々のかわりに、最初のうちは、おそらく経験や知識や素養の点で劣っているであろうが、しかし大衆と広範に結びつき、故人となった偉大な人材にかわって、彼らの事業をうけつぎ、彼らの道をすすみ、彼らのはじめた仕事を完成させる人々の集団をおしだす能力をもった、他の人々の隊列を生みだすことを、われわれは知っている。この意味で、われわれはこうふかく確信している。ロシアと全世界とのプロレタリア革命は、それなしには幾百万のプロレタリア軍が勝利を獲得することのできないような、生活の実際知識や個人的あるい

は集団的な組織者的才能をあたえるような、人々の集団を、多数の層を、プロレタリアのなかから、勤労農民のなかからおしだすであろう、と。

同志ヤ・エム・スヴェルドロフの思い出は、自分の事業にたいする革命家の忠誠の永遠の象徴となるだけでなく、実践的冷静さと実践的手腕の結合、大衆との、彼らを指導する能力との、完全な結びつきの模範となるだけでなく、――ますます広範なプロレタリア大衆が、これらの手本にしたがって、世界共産主義革命の完全な勝利をめざして、前進また前進していくための保障ともなるであろう」（前出、七三―七四ページ、傍点―山本）。

まさしく、レーニンが確言しているように、「絶対に議論の余地のない威信をもつようになった組織者」、「ソヴェト権力を実現した党の活動の組織者」を生みだしたのは、「非合法サークルと地下活動の学校」であり、「迫害されたボリシェヴィキの小政党とトゥルハンスクの監獄の学校」であり、ほかならぬ職業的革命家の隊列そのものであったのである。そして、このようなすぐれた組織者をこそ模範として、プロレタリア軍は革命への前進をはからねばならないと、レーニンは強調している。このように、傑出した職業的革命家の果した多大の役割とその歴史的意義をこのうえもなく力強く強調したレーニンの追悼の辞を、もしトロツキーがたくみにたちまわってまんまと全ロシア中央執行委員会特別会議の末席のひとつを占めることができて、これを聴いていたとするならば、彼トロツキーは、はたしてどんな顔をしていたことだろうか？　おそらくは、「トゥーシノの渡り者」にふさわしく、かつて九年前にボリシェヴィキおよび職業的革命家に――外国党の機関誌をかりて――大々的に非難と罵倒の言葉を浴びせたことなどおくびにも出さず、「レーニンにもっとも近いボリシェヴィク」といった神妙な顔付をして、いちいちもっともらしくうなずいていたことであろう！[78]

(78) この「トゥーシノの渡り者」が、相もかわらず自家宣伝用に一九二九年書きあげた大部の自伝『わが生涯』のなかでは、職業的革命家についてなんと言っているか？　さきに本稿の注（58）で引用したように、彼は一九〇二年夏流刑地でマルクス主義の新聞『イスクラ』が外国で発行されたことを知ったと述べ、この『イスクラ』が、「**鉄の規律でたがいにかたく結びつけられた職業的革命家の中央集権化された組織をつくることを目的としていた**」と明記し、さらにレーニンの著書『なにをなすべきか？』を読んだこと、この著書が「**同じ問題**」をとりあげていること、トロツキー自身の貧相な活動が「**われわれの直面しているこの新しい巨大な課題**」を前にしてまったくとるにたりないものに見え、そのために流刑から脱走して他の活動分野をさがすことになったことなどを説明している。一九〇三年から一九一六年まで、なんと十四年間にわたって、「革命へのかぎりない献身」と「能力」と「素質」と、そして「無条件に議論の余地のない威信」を身につけた職業的革命家＝ボリシェヴィキにたいして、ありとあらゆる悪罵と中傷を書きたててこれに敵対する自身の亡命インテリ集団の宣伝に、まさに憂身をやつしていた「革命家」が、一九二九年の「自伝」のなかでは、かつて罵詈雑言を書きたてたことなどおくびにも出さず、いけしゃあしゃあと、職業的革命家の組織が巨大な意義をもったものだということを書きたてて、さも彼自身もその重要なメンバーの一人であったかのような印象を読者にあたえるべく、猿知恵をひねっているのである。こういう男は、いったい、「革命家」の名に値するものといえようか！　これこそ、札つきのペテン師、煽動政治屋のこのうえもなくみごとなお手本ではあるまいか！　だが、おどろいたことに、こういう下劣な破廉恥漢を、なんと、レーニンにつぐ「革命的指導者」だとしてけんめいにその売出しにつとめている小粒煽動政治屋どもとこれにふりまわされている不勉強な小ブル的「左翼」インテリたちは、この国でいまなおそのあとをたたない。まことに皮肉屋マルクスの示唆しているように、資本主義社会のありがたさは、どんな「効用」をもった「商品」でも、およそなんらか「効用」のあるかぎり、これに釣られておめでたい買手がひとりでにあつまってくる、という点にあるのである。

つぎに「政治的スローガン」や「一般的な綱領的要求」などはけっして出してはならず、もっぱら広範な、おくれた労働者大衆をめあてにして彼らの日常的「要求」や目前の「経済的利益」を第一に考えなければならないという、党活動についてのトロツキーの基本的な主張について。党活動のあり方についてのこのような考え方は、さきに見た

経済主義者の考え方とそっくり同じものである。レーニンは、経済主義者にたいする徹底的な批判を展開した前述の論文、『ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向』（一八九九年末執筆）のなかで、ロシアの社会民主主義者の活動が宣伝から広範な煽動へうつりはじめ、多数の自覚した先進的労働者が運動に加わり、革命的諸組織が結成されるようになったが、それと同時に、煽動の普及によって、社会民主主義者はプロレタリアートのうちのもっともおくれた、低い諸層と接触することになり、これらの層をひきよせるために、もっとも低い理解水準に順応する能力が煽動家に要求されることから、もっぱら「目前の要求と利益」を前面におしだし、社会主義と政治闘争の広範な理想をおしのけるという、慨嘆すべき習慣が生まれるようになり、もっとも意識の高い労働者とインテリゲンツィアが弾圧により前線部隊の戦列から離脱することとあいまって、経済主義的傾向が強められるにいたったことを説明し、そのために「プロレタリアートの低い諸層にたいする先進的諸層の関係や、両方の層のなかでの社会民主主義的活動の意義の問題」についてなおたちいった考察を加える必要があるとして、これらの問題について、つぎのような詳細で正確な解明をあたえている。このレーニンの解明は、こんにちの「前衛党」の活動の性格を的確に識別するうえでこの上もなく適切とおもわれる教訓を多々ふくんでいるので、いささか長きに失するが――直接主題にかかわりのすくない個所はできるだけ省くことにして、――その全内容をつぎに紹介することにしよう。

「あらゆる国の労働運動の歴史は、労働者のうちのもっとも良い地位におかれた諸層が、もっともはやく、またもっとも容易に社会主義の思想をうけいれる、ということを実証している。あらゆる労働運動によっておくりだされてくる**先進的労働者**、すなわち、労働者大衆の完全な信頼を獲得する能力をもった労働者、プロレタリアートの啓蒙と組織化の事業に全身をうちこむ労働者、社会主義をまったく意識的にうけいれ、自主的に社会主義理論をつくりあげさ

えした労働者は、主としてこうした労働者層のなかからあらわれてくるのである。あらゆる生命力ある労働運動はこのような労働者の指導者を、自分たちのブルードンやヴァイヤン、ヴァイトリングやベーベルを、おくりだしてきた。わがロシアの労働運動も、この点ではヨーロッパのそれにおくれをとらないという見込みがある。教養ある社会がまじめな非合法文献にたいする興味を失いつつあるとき、労働者のあいだでは、知識と社会主義への熱烈な志向が増大しており、労働者のあいだでは真の英雄が頭角をあらわしつつある。これらの英雄は、――その惨憺たる生活環境にもかかわらず、人間を愚鈍にする工場での苦役にもかかわらず――、学び学び、さらに学び、自分を意識的な社会民主主義者、「**労働者インテリゲンツィア**」に鍛えあげていくだけの性格と意志力とをもちあわせている。ロシアにはすでにこうした「**労働者インテリゲンツィア**」が存在しており、われわれは、彼らの隊列をたえず拡大し、彼らの高度な知的要求を完全にみたし、彼らの隊列のなかからロシア社会民主労働党の指導者たちが生まれでるようにならせるため、全力をそそがなければならない。だから、**ロシアの社会民主主義者全体の機関紙となろうと欲する新聞は、先進的労働者の水準に立たなければならない。**それは、自分の水準を故意に引き下げてはならないばかりでなく、反対に、たえずそれを引き上げていき、全世界の社会民主主義派のあらゆる戦術上、政治上、理論上の諸問題を注視しなければならない。そうしてこそはじめて、労働者インテリゲンツィアの要求はみたされるであろうし、彼らはロシアの労働者の事業を、したがってまたロシアの革命の事業をも、みずから自分の手ににぎるであろう。

数の上では多くない先進分子の層のうしろには、中位の労働者の広範な層がつづいている。この中位の労働者も、社会主義を熱心に希求し、労働者サークルに参加し、社会主義の新聞や書物を読み、煽動に参加するが、社会民主主義的労働運動のまったく自主的な指導者となりえない点でだけ、前記の層とちがっている。党の機関紙となるはずの

新聞では、一部の論文は中位の労働者には理解できないであろうし、また彼らは複雑な理論上または実践上の問題を完全に理解することはできないであろう。**それだからといって、新聞は自分の読者大衆の水準にまで下りていかなければならない、という結論にはけっしてならない。反対に、まさに彼らの水準を引き上げ、中位の労働者層のなかから先進的労働者が頭角をあらわしてくるのをたすけなければならない。**地方の実践活動に没頭しており、なによりも多く労働運動の日々の記録と当面の煽動問題とに関心をもっているこのような労働者は、自分の一歩一歩に、ロシアの労働運動全体とその歴史的任務と社会主義の終局目標とにかんする思想を結びつけなければならない。したがって、中位の労働者をその読者大衆とする新聞は、かならず一つ一つの狭い地方的問題と社会主義および政治闘争とを結びつけなければならない。

最後に、中位の層のうしろには、プロレタリアートの低い諸層の大衆がつづいている。社会主義新聞が、彼らにとってまったく、あるいはほとんどまったく、近づきえないということも、大いにありうることであるが（西ヨーロッパでも、社会民主主義的な選挙有権者の数は、社会民主主義新聞の読者の数よりもはるかに多いではないか）、**そのことから、社会民主主義者の新聞は労働者のできるだけ低い水準に順応しなければならない、という結論を引きだすのは不合理であろう。**このことからはただ、このような諸層にたいしては、別な煽動・宣伝の手段、すなわち、もっとも通俗的に書かれた小冊子や、口頭での煽動や、また――これが主要なものであるが――地方の出来事にかんするビラで働きかけなければならない、という結論が出てくるだけである。社会民主主義者は、これらにさえかぎってはならない。労働者の低い諸層のあいだに意識を目覚めさせるための第一歩が、合法的な啓蒙活動によって分担されなければならないことも、大いにありうるのである。党にとってひじょうに重要なことは、この活動を利用すること、

この活動を、まさにそれをもっとも必要としているところへさし向けること、合法的活動家を処女地の開墾へさし向け、あとで社会民主主義的煽動家が、そこに種子を蒔くようにすることである。労働者の低い諸層のあいだでの煽動は、もちろん、煽動家の個人的特質や、場所、職業、その他の特殊性をもっとも十分に発揮させるものでなければならない。……ただ組織された党のなかでのみ、煽動家の才能をもっている人々は、この仕事に全身をうちこむことができるであろうが、そのことは、煽動にとっても、社会民主主義活動のその他の側面にとっても、利益である。ここからして明らかになるのは、経済闘争に心をうばわれて政治的煽動・宣伝をわすれ、労働運動を政党の闘争へ組織する必要を忘れるものは、ほかのことはすべてさしおくとしても、プロレタリアートのもっとも低い諸層を労働者の事業へ引きよせる仕事をしっかり、効果的に組織する可能性をさえ、みずから棄てるものだ、ということである。

だが、活動の他の諸側面を犠牲にして、一つの側面をこのように誇張すること、しかもはなはだしいときには、それらの他の側面を全然棄てさる意図をもってそうすることは、ロシアの労働運動にさらに比較にならないほど有害な結果をもたらす恐れがある。もし、ロシア社会民主主義派の創始者たちが労働者を専制打倒のための手段としか考えていないかのようにいう中傷を、プロレタリアートの低い諸層が耳にするなら、もし、社会主義の終局目標と政治闘争とを捨ておいて休日の復活や同職組合のことだけにかぎるように、という勧告を彼らが耳にするなら、**彼らは直接に堕落させられる恐れがある**。このような労働者は、政府やブルジョアジーの側からのどのような施し物に出会っても、たちまちそのわなに引っかかる恐れがある（また引っかかるであろう）。『ラボーチャヤ・ムィスリ』の説教に影響されて、**プロレタリアートの低い諸層、まったく未発達の労働者は、つぎのようなブルジョア的な、ひどく反動的な信念を骨の髄までかためる恐れがある**。それは、すなわち、労働者は、賃銀の増額と休日の復活（「現瞬間の利益」）

よりほかには、なにごとにも関心をもちえないし、またもってはならず、働く人民は、労働者の事業を社会主義と融合させることを目指したり、労働者の事業を全人類の先進的な、緊要な事業に転化させることを目指したりせずに、もっぱら自分の独力で、もっぱら自分の「個人的イニシァティヴ」で、労働者の事業を遂行することができ、また、遂行しなければならない、というのである。くりかえしていうが、もっとも未発達の労働者は、このような信念によって堕落させられる恐れがあるが、しかし、ロシアの先進的な労働者たち、労働者サークルや社会民主主義的活動全体を指導している人々、こんにちアルハンゲリスク県から東シベリアまでの、わが国の牢獄と流刑地をみたしている人々、これらの労働者は、憤激をもってこの種の理論を排撃するであろうと、われわれは確信している。**全運動を現瞬間の利益に帰着させるということは、労働者の未発達をあてこみ、彼らのもっとも劣等な欲情の道具となることを意味する。**それは、労働運動と社会主義とのあいだの結びつきを、先進的労働者の完全に明確化された政治的志向と、大衆の抗議の自然発生的な現われとの結びつきを、人為的に断ちきることを意味する。だからこそ、独特の方向を提唱しようとする『ラボーチャヤ・ムィスリ』の試みには、特別の注意をはらう値うちがあり、それにたいしては、とくに精力的に抗議しなければならないのである。……」（前出、第四巻、二五七―二六一ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

たとえどんなにうわっつらの文字しか読めない小ブル的俗物であっても、ここにはつぎの三つの、決定的に重要な基本点が明確に示されているということを、見落すことはできないであろう。

第一に、レーニンは、党の中核を成すものは、先進的労働者、「労働者インテリゲンツィア」でなければならないこと、けっして中位の労働者が党の大部分を占めてはならないし、いわんや、意識のおくれた、未発達の、職業的利

益のみを第一に考える低い層の労働者を党の中に加えてはならないことを、このうえもなくきっぱりと指示している。このことは、党がプロレタリアートの精鋭をすぐった前衛部隊であること、党員のひとりひとりは必ず社会民主主義的労働運動の自主的な指導者でなければならないということを考えれば、むしろ当然すぎるくらい当然のことである。これにたいして、トロツキーは、労働組合、労働者クラブ、自治体組織など、どんな大衆組織にでも入っていて職業的利益のみを第一に考える低い「職業的労働者」も、職業的利益のために運動するかぎり、そのままでりっぱな「社会民主主義的労働者」であり、これらの「職業的労働者」こそが党の中核とならなければならないと、くりかえし主張している。これは、前衛党を意識のおくれた、経済的利益のために運動する大衆団体につくりかえてしまう主張であって、直接に前衛組織を破壊するものであり、まぎれもなく、最悪の解党主義的主張である。

第二に、「理論的な定式やスローガン」を正しくきめ、「一般的な綱領的要求」をかかげて政治的煽動・宣伝につとめ、労働運動を政党の闘争へ組織するという緊急の任務を忘れて、もっぱら日常的な「階級的」利益のための経済闘争に熱をいれるばかりでなく、正統な社会民主主義派の指導者たちをとらえて労働者を専制打倒という政治闘争のための道具としてしか考えていないものだと中傷しながら、労働者にたいして社会主義の終局目標と政治闘争など捨ててもっぱら職業的闘争、経済的利益のための闘争にかぎるように勧告することは、低い層の労働者を直接に堕落させるものであり、労働者の未発達をあてこみ、彼らのもっとも劣等な欲情の道具となることだ、とレーニンは明示している。意識のおくれた労働者にたいして、「社会主義的インテリゲンツィア」をば右のような「組織的独裁」をしいている「秘密の政治的集団」としてえがきだし、これらの指導者たちにむかって低い労働者層をけしかけ、もっぱら全運動を「現瞬間の利益」に適合させるよう執ように主張しているトロツキーこそは、まさに、右のレーニンの指

摘にぴったりあてはまるもの、つまり、低い層の労働者を直接に堕落させるもの、労働者の未発達をあてこみ、彼らのもっとも劣等な欲情の道具となるものであり、しかも、これによって自己の政治的野心をとげようという、このうえもなく醜悪な煽動政治屋にほかならない。

第三に、以上二点とかたくむすびついたものとして、レーニンは、前衛党の機関紙のあり方を明確に規定している。すなわち、前衛党の機関紙は、かならず、党の中核を成す先進的労働者の水準に立つものでなければならないこと、けっして中位の労働者の水準にまで下りていってはならず、その反対に中位の労働者の水準を引きあげてこれを先進的労働者の水準にまで高めるものでなければならないこと、いわんや、それは、労働者のもっとも低い水準に順応するなどということはけっしてしてはならないこと、[79] これらの低い層にたいしては別の煽動・宣伝の手段をつかわなければならないこと、――こうしたことがこのうえもなくはっきりと指示されている。トロツキーは、もちろん、前衛党を指導する地位についたこともなく、たんに在外亡命者の野心的インテリの小グループの「指導者」として、ヴィーンの『プラウダ』紙を発行したにすぎないが、この新聞が、労働者のうちのもっとも低い層を狙って、社会民主労働党のすぐれた指導者たち――とくにボリシェヴィキの頭領、レーニン――にたいする下劣な中傷と悪罵を書きつらねて、彼らのもっとも劣等な欲情をあおりたて、もっぱら労働者の直接の堕落に奉仕したものだということは、トロッキー自身の言葉――「労働者新聞『プラウダ』は、まさに、右のような新しい党要素を眼中においた」（Ⅳの⑨）――によっても、明白に示されている。このような、前衛党の解体、指導者層への非難と攻撃、労働者大衆の堕落とひきかえに、指導者としての自身の名前を売り出すために発行した『プラウダ』が先進的労働者の一人もとらえることができず、ほんの少数の亡命小ブル・インテリと、同じく小ブル的労働者しかその周囲にかきあつめることができなかっ

たのは、理の当然である。そのために、手段をえらばない野心的煽動政治屋の選んだのが、権威ある『ノイエ・ツァイト』の紙面を利用することであり、また同じドイツ社会民主党の機関紙『フォアヴェルツ』を利用することである。彼トロツキーがこれらの紙面をかりて、どんなにえげつない自家宣伝兼中傷の捏造記事を書きちらしているかは、当面の論文がこれをよく示しているが、なお、のちほどとりあげられる彼の他の諸論説によっても、はっきりとこれを確認することができるのである。

(79) この点で、レーニンの指示と真っ向うから背反する方針を示しているのは、今日「日本共産党」という名の「修正主義集団」の発行している機関紙『赤旗』である。この『赤旗』には、勤労大衆の頭脳をもっとも卑俗なものに仕立てるためにいちじるしい効果をあげているラジオ・テレビ番組が毎日載せられているばかりでなく、ごていねいにも、プロ野球、プロ角力から、さては競輪、競馬にいたるまで、ギャンブルに眼の色をかえる大衆が読みたくなるような記事がいっぱい載せられている。ギャンブル・ファンにとってもためになる共産主義党の機関紙!! こうした記事のあり方ひとつとってみても、「日本共産党」がマルクス・レーニン主義を基本とする真実の共産党とは、たんにその名前が共通するだけであって、その実体はまさに正反対のものであることが、よくわかる。それは、レーニンの教示しているような、先進的労働者を中核とする革命的前衛党ではけっしてなく、ホワイト・カラーのインテリゲンツィアと一部の高・中給労働者を中核とする小ブル的反政府党でしかなく、もっとも低劣な水準の労働者のおくれた、劣等な欲情を温存し、これにとりいってまでして一票にありつきたいと、もっぱら票集めに狂奔する反革命的徒党にほかならない。意識のおくれた労働者の低劣水準に便乗し、これにおもねって支持票をかきあつめようと、無い知恵をしぼり、ありとあらゆる術策を弄して、先進的労働者の成長と組織化および真実の革命的前衛党の結成とその発展を執拗に妨害することに全力をつくしているという点でも、トロツキーおよびその一派と、わが「日共修正主義集団」とは、親密このうえもない「同志」関係にあるといってよい。

以上により、党にかんするトロツキーの考え方の基本は、ほぼ正確にとらえることができたとおもわれる。一言でつくせば、トロツキーの主張は、典型的な解党主義的主張である。この反革命的な解党主義的主張は、トロツキーが

一九一七年まで堅持していたもので、一九〇三年第二回党大会のとき、およびそれ以後その時々の重大な問題に当面したとき、どのような形をとって現われるかは、行論においてあきらかにされるところである。

二十

さて、つぎに考察しなければならないのは、第三の重要な問題としてあげられた「ロシア社会民主主義派」内部の各「派」のとらえ方である。「経済主義者」については、その実態とこれにたいするレーニンの闘争とを跡づけ、これらの歴史的事実とつきあわせてみたとき、彼トロツキーの「経済主義者」についての記述がどんなにでたらめなものであるか、彼トロツキー自身こそいかにもっとも陰険な「経済主義者」にほかならないものであるか、ということが、これまでの検討によって明白となった。そこで以下では、主として「ボリシェヴィキ」と「メンシェヴィキ」とについて、トロツキーがこの両派をどうとらえ、どのように説明しているかということを、同じく歴史的事実とつきあわせて、正確に検討を加えていくことにしよう。

周知のように、ロシア社会民主労働党がボリシェヴィキとメンシェヴィキとに分裂したのは、レーニンの『イスクラ』によって準備され、一九〇三年七月から八月にかけて、ブリュッセルおよびロンドンで開かれた、ロシア社会民主労働党第二回大会の席上においてである。第二回大会以降、両派の分裂・抗争がどのようにおこなわれたかをみるために、ここでまず、それ以後の党大会および党協議会のおこなれた日付およびそこでの代議員の各派別構成を簡単に示しておくことにしよう。

（一九〇五年一月九日、「血の日曜日」――一九〇五年革命の発端）

一九〇五年四月（ロンドン）、ロシア社会民主労働党第三回大会――はじめてのボリシェヴィキ的大会。メンシェヴィキは招待されたが、大会参加を拒否し、別にジュネーヴでメンシェヴィキ＝新「イスクラ」派の大会を同時に召集した。しかし、その代議員数がすくなかったので、彼らはこの会議を「協議会」と呼んだ。(80)

(80) ボリシェヴィキの第三回大会およびメンシェヴィキの協議会でそれぞれ採択された戦術方針にたいして、的確な比較・検討を加えているのが、レーニンの労作、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（一九〇五年七月）である。

一九〇六年四月（ストックホルム）、ロシア社会民主労働党第四回（統一）大会。大会には、党の五七の地方組織を代表する議決権をもった一一二人の代議員と、評議権をもった二二人の代議員が出席した。（議決権をもった代議員には、メンシェヴィキ六二名、ボリシェヴィキ四六名）。そのほかに民族的社会民主主義政党の代表がつぎのように加わった、――ポーランド・リトワニア社会民主党、ブンド、ラトヴィア社会民主労働党から三名づつ、ウクライナ社会民主労働党、フィンランド労働党、ブルガリア社会民主労働党から一名づつ。この大会ではメンシェヴィキが優勢を占め、大会で選ばれた中央委員会は、ボリシェヴィキ三名にたいしてメンシェヴィキ七名から成っており、中央機関紙編集局はメンシェヴィキが独占した。

一九〇七年四月―五月（ロンドン）、ロシア社会民主労働党第五回大会。大会には議決権および評議権をもつ三三六名の代議員が参加（ボリシェヴィキ―一〇五名、メンシェヴィキ―九七名、ブンド―五七名、ポーランド社会民主党―四四名、ラトヴィア社会民主党―二九名、分派に属しないもの―四四名）。ボリシェヴィキはポーランド人とラトヴィア人とを味方として、大会でゆるぎない多数を保持し、大会は日和見主義―メンシェヴィズム―にたいするボリシェヴィズムの勝利をもって終った。

一九〇七年七月（フィンランドのコトカ）、ロシア社会民主労働党第三回協議会。代議員の構成は、ボリシェヴィキ—九名、メンシェヴィキ—五名、ポーランド社会民主党—五名、ブンド—五名、ラトヴィア社会民主党—二名。

一九〇七年十一月[81]（ヘルシングフォルス）、ロシア社会民主労働党第四回協議会。代議員は、ボリシェヴィキ—一〇名、メンシェヴィキ—四名、ポーランド社会民主党—五名、ブンド—五名、ラトヴィア社会民主党—三名。

(81) これとほぼ同じ時に出されたのが、レーニンの労作、『一九〇五—一九〇七年第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』である。

一九〇八年十二月（パリ）、ロシア社会民主労働党第五回協議会。[82] 代議員は、ボリシェヴィキ—五名、メンシェヴィキ—三名、ポーランド社会民主党—五名、ブンド—三名。レーニンは党中央委員会代表として出席。この会議で党内の二つの日和見主義—解党派と召還派—にたいする闘争への呼びかけがおこなわれる。

(82) トロツキーが一九一〇年『ノイエ・ツァイト』に発表した例の大論説のVで、「双方の分派は、ひとつの協定を結ばざるをえない羽目にあることをさとって、協定を結んだ」と書きたてているその「合同」の会議とは、このパリー協議会を指して言ったものである。

一九一二年一月（プラーグ）、ロシア社会民主労働党第六回全国協議会。この協議会の決定によりメンシェヴィキは党から追放され、ひとつの党内でのボリシェヴィキとメンシェヴィキとの形式的統一は永久になくなった。このプラーグ会議は、レーニン主義の党、ボリシェヴィキ党の基礎をおいた歴史的な協議会である。

ところで、第二回党大会における分裂がなぜ、どのようにおこなわれたかということについては、レーニン自身がその有名な労作、『一歩前進、二歩後退（わが党の危機）』（一九〇四年）のなかで詳細な説明をしている。しかし、こ

れはあまりにも詳細かつ大部であって、分裂の経過を簡単にとらえるには、いささか不向きといわざるをえない。幸いにも、第二回党大会の成立以前のことから、大会での分裂の事情および大会以後の模様まで、その概略を簡潔に綴った文章をレーニン自身が書きのこしていてくれるので、われわれはこれをつぎに引用して大体の事情をつかむこととし、なお必要ある場合にかぎって上記の労作の該当個所を参照することにしたいとかんがえる。このレーニンの文章は、『ロシア社会民主労働党の分裂の簡単な概説』と題されるもので、その前文(83)にも明示されてあるように、スイスの社会民主主義者ヘルマン・グロイリヒへの手紙の内容である。この文章は、一九〇五年二月、ロシア社会民主労働党ベルン（スイス）協力グループにより単行のリーフレットとして出版されたものである。われわれは、以下での論究の便宜を考慮し、またとくにトロツキーのもっとも得意とする歴史的事実についての破廉恥な贋作と捏造との真価を十二分に鑑賞する必要上、事実経過を簡潔に叙述している右の文章をあまさずつぎに引用してかかげることにしよう。

(83) この前文は、つぎのとおりである（末尾の部分は省略）。

「スイス社会民主主義者の有名な指導者ヘルマン・グロイリヒは、（ロシア社会民主労働党の）新聞『フペリョード』の編集局あての一九〇五年二月一日付の手紙のなかで、とりわけロシアの社会民主主義者の間の新しい分裂について遺憾の意を表明し、つぎのように述べている、――「だれがこの分裂により多く責任があるかを、わたしはきめようとはおもわない。わたしは、ドイツ社会民主党の指導部にこの問題を国際的方法で解決するように提案した」と。

グロイリヒのこの手紙にたいして、『フペリョード』編集局は、ロシア国内の「多数派諸委員会（ボリシェヴィキ）ビューロー」の在外全権代表である同志ステパーノフと連名で、つぎのような手紙をもって回答した。

同志グロイリヒが国際的解決に訴えようと意図していることにかんがみ、われわれは、グロイリヒあてのわれわれの手紙を新聞『フペリョード』のすべての在外友人諸君に通知し、それらの友人諸君に、この手紙を自分の住んでいる国の言語に翻訳、

し、できるだけ多数の外国の社会民主主義者にこの手紙を知らせるようおねがいする」（全集第四版、第八巻、一〇五ページ、傍点―原文）。

「　グロイリヒへの手紙

一九〇五年二月三日

敬愛する同志！　あなたは、お手紙のなかで、わが党（ロシア社会民主労働党）の二つの分派のどちらに分裂の責任があるかという問題にふれておられる。あなたは、このことについてドイツ社会民主党と国際〔社会主義〕ビューローとの意見を問いあわせた、と言っている。このためわれわれは、分裂がどのようにしておこったかをあなたに説明することをわれわれの義務と考える。ここで、正確に証拠だてられている諸事実をあげるだけにとどめ、それらの事実についての評価は、できるだけいっさいおこなわないことにする。

一九〇二年末までは、わが党は、委員会と呼ばれる、相互に結びつきのない地方的な社会民主主義諸組織の複合体であった。中央委員会と中央機関紙は。第一回党大会（一八九八年）春で選出されたものの、存在してはいなかった。警察がそれらを破壊し、そしてそれらは再建されなかったのである。国外では「ロシア社会民主主義者同盟」（機関紙は『ラボーチェエ・デーロ』、そこから「ラボーチェエ・デーロ派」という言葉がでた）とプレハーノフのあいだに分裂がおこった。プレハーノフの側には、一九〇〇年に創刊された新聞『イスクラ』が立った。一九〇〇―一九〇三年の三年のあいだに、『イスクラ』はロシア国内の諸委員会にたいする圧倒的な影響力をかちえた。『イスクラ』は、「経済主義」（別名「ラボーチェエ・デーロ主義」イコール日和見主義のロシア的変種）に反対して革命的社会民主主義の思想をまもった。

党の統一のないことがすべての人々の心に重くのしかかっていた。

ついに、一九〇三年八月に、国外で第二回党大会をひらくことに成功した。これには、ロシア国内のすべての委員会と、ブンド（Bund イコール、ユダヤ人プロレタリアートの独自の組織）と、二つの在外分派――「イスクラ」派および「ラボーチェエ・デーロ」派――が参加した。

大会参加者はすべて大会を適法のものとみとめた。大会の闘争はイスクラ派と反イスクラ派（ラボーチェエ・デーロおよびブンド）とのあいだにおこなわれ、いわゆる「沼地」派が中間を占めた。イスクラ派が勝利した。彼らは党綱領を通過させた（『イスクラ』の草案が確認された）。『イスクラ』は中央機関紙として承認され、その方向は党の方向として承認された。戦術にかんする一連の決議は『イスクラ』の精神で書かれていた。イスクラ派の組織規約（レーニンの草案）が採択された。ただ細目の点で、反イスクラ派は、イスクラ少数派の参加を得てそれを改悪した。大会での票のグループ分けは、つぎのとおりであった。総数は五一票。うち三三票がイスクラ派（二四票はこんにちの多数派に属するイスクラ派、九票はこんにちの少数派に属するイスクラ派）で、一〇票が「沼地」派、八票が反イスクラ派（三人のラボーチェエ・デーロ派と五人のブンド派）であった。大会の終りごろ、選挙の前に七人の代議員（二人のラボーチェエ・デーロ派と五人のブンド派）が大会から退場した（ブンドは党から脱退した）。

イスクラ少数派は、そのおかした誤りのおかげですべての反イスクラ派と沼地派から支持されていたのであるが、このときにそれは大会の少数派となった（24 対 9＋10＋1，つまり 24 対 20）。中央諸機関の選挙にさいしては、中央機関紙編集局に三名、中央委員会に三名を選出することに決定された。『イスクラ』旧編集局の六人（プレハーノフ、アクセリロード、ザスーリッチ、スタロヴェル、レーニン、マルトフ）のうち、プレハーノフ、レーニンおよび

マルトフが選出された。中央委員会へは多数派から二名、少数派から一名を選出しようということになった。

マルトフは、「除外された」（選出されなかった）三人の同志といっしょでなければ編集局にはいることを拒否し、少数派全体が中央委員会の選挙を拒否した。だれも、かつてこの選挙の適法性に異議をとなえたものはいなかったし、いまでもいない。だが少数派は、大会後に、大会の選出した中央諸機関の指導のもとではたらくことを拒否した。

このボイコットは、一九〇三年八月末から一九〇三年十一月まで、三ヵ月つづいた。『イスクラ』（第四六―五一号の六号）は、プレハーノフとレーニンが二人で編集した。少数派は党内に秘密組織をつくった（これは、いまでは少数派の支持者たち自身によって出版物のなかで確認されていて、現在ではだれも否定していない事実である）。ロシア国内の諸委員会は、この組織撹乱的なボイコットにたいして、圧倒的な多数（すでに意見を表明するおりのあった一四の委員会のうちの一二）で反対した。

しかし、プレハーノフは、一九〇三年十月末におこなわれた在外「連盟」（＝党の在外組織）の波瀾にみちた大会ののち、少数派に譲歩しようと決意し、論文『なにをなすべきでないか』（『イスクラ』、第五二号、一九〇三年十一月）のなかで、分裂を避けるためには、誤って修正主義に傾き、無政府主義的個人主義者として行動している人々にたいしてさえ（傍点をつけた表現は、論文『なにをなすべきでないか』のなかのプレハーノフのそのままの表現）、ときには譲歩しなければならない、と全党の前で声明した。レーニンは、大会の決定にそむくことを欲せず、編集局を脱退した。そのときプレハーノフは、四人の旧編集局員全部を「自主補充した」。ロシア国内の諸委員会は、新『イスクラ』の方向がどんなものになるかをみよう、メンシェヴィキが編集局にはいったのは平和のためなのかどうかをみよう、と声明した。

ボリシェヴィキが予言していたように、旧『イスクラ』の方向もまもられなければ、新しいメンシェヴィキ的編集局は党内に平和をあたえもしなかったことが、わかった。『イスクラ』の方向は、第二回大会で否認された古いラボーチェエ・デーロ主義にまで逆戻りしたので、少数派の著名なメンバーで、『われわれの政治的任務』という綱領的な小冊子――**新『イスクラ』の編集で出版された小冊子**――を出したトロツキー自身が、文字どおり、「**旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある**」と、言明したほどである。新『イスクラ』の原則上の浮動性にかんする長々しい説明にはいらないために、われわれは、われわれの反対者の右の言明をあげるだけにとどめておく。

他方、「少数派の秘密組織」は解散せず、中央委員会のボイコットをつづけた。党がこのように秘密のうちに公然たる組織と秘密の組織とに分裂したことは、耐えがたいほど活動を阻害した。危機について意見をのべたロシア国内の委員会の圧倒的多数は、新『イスクラ』の方向をも、少数派の組織撹乱者的な振舞をも、断固として非難した。この耐えられない状態から脱するために第三回大会を即時召集せよという要求が、あらゆる方面からあがった。

われわれの党規約によれば、臨時大会を召集するためには（定例大会は「なるべく」二年に一回召集される）、あわせて総票数の半数をもつ諸組織の意見の表明が必要である。**この半数はすでに達せられていた**。だが、ここで中央委員会は、多数派に属する数名の中央委員の逮捕に乗じて、多数派を裏ぎった。逮捕後に残っていた中央委員たちは、「調停」という口実のもとに、少数派の秘密組織と取引をはじめ、この秘密組織は解散しようとしている、と言明した。そのさい党には内密に、そして中央委員会の文書による声明にそむいて、三人のメンシェヴィキが中央委員会に自主補充された。この補充は一九〇四年の十一月か十二月におこなわれた。このように、少数派は、一九〇三年八月から一九〇四年十一月にかけて、党全体を引きさきながら、中央機関紙に三名と中央委員会に三名を補充させるため

にたたかったのである。

このようにして偽造された中央諸機関は、大会開催の要求に罵詈もしくは黙殺をもってこたえた。そのとき、ロシア国内の委員会の堪忍袋の緒は完全に切れた。それらの委員会は自分たちの私的な協議会を召集しはじめた。こんにちまでにつぎの三つの協議会が開催された。すなわち、（一）四つのカフカーズの委員会の協議会（二）三つの南部の委員会（オデッサ、ニコラーエフ、エカテェリノスラフ）の協議会、（三）六つの北部の委員会（ペテルブルグ、モスクワ、トヴェーリ、リガ、「北部」――すなわち、ヤロスラヴリ、コストロマ、ヴラヂーミル――および最後にニジニーノヴゴロド）の協議会、である。これらの協議会はすでに「多数派」に賛成を表明し、多数派の文筆家グループ（レーニン、リャドヴォイ、オルロフスキー、ガリョールカ、ヴォイノフその他のグループ）を支持することを決定し、**自分たちのビューロー**を選出した。第三の、すなわち北部の協議会は、この「ビューロー」にたいして、みずから組織委員会になり、党から離脱した在外中央機関をかえりみずに、ロシア国内の諸委員会の大会、すなわち第三回党大会を召集することを、委任した。

一九〇五年一月一日（新暦）現在の事態はこのようなものであった。多数派諸委員会ビューローはその活動をはじめた（わが国の警察的諸条件のため、大会の召集は、もちろん数ヵ月先きのことになるであろう。第二回大会についての告知は一九〇二年十二月になされたが、それが召集されたのは一九〇三年八月であった）。多数派の文筆家グループは多数派の機関新聞『フペリョード』を創設し、それは一九〇五年一月四日（新暦）から**週刊で**発行されはじめた。いま（一九〇五年二月三日）すでに四号でている。『フペリョード』紙の方向は旧「イスクラ」の方向である。旧『イスクラ』の名において、『フペリョード』は新『イスクラ』と断固としてたたかっている。

したがって、実際には、二つのロシア社会民主労働党があったわけである。一方は、「正式には」党中央機関紙と称されている機関紙『イスクラ』と、中央委員会と、ロシア国内の二〇の委員会のうちの四つの委員会とをもっている（第二回大会に出席した二〇の委員会以外のロシア国内の委員会は、その後に生まれたものであって、それの確認の適法性の問題は議論の余地ある問題である）。他方は、機関紙『フペリョード』と、「多数派ロシア諸委員会ビューロー」と、ロシア国内の一四の委員会（さきにあげた一三の委員会プラス、ヴォロネジ委員会、またおそらくは、これに加えて、サラトフ、ウラル、トゥーラ、シベリアの諸委員会）とをもっている。(1)

（1）すくなくとも、最後の四つの委員会はみな、第二回大会後に「多数派」に賛成を表明した。

「新イスクラ派」の側に立っているのは、旧『イスクラ』の反対者の全部と、ラボーチェエ・デーロ派の全部と、党周辺のインテリゲンツィアの大きな部分とである。「フペリョード派」の側に立っているのは、原則上信念の堅い旧『イスクラ』支持者の全部と、ロシア国内の自覚ある先進的労働者および実践的活動家の大きな部分とである。第二回党大会（一九〇三年八月）と連盟大会（一九〇三年十月）ではボリシェヴィキであったが、一九〇三年十一月からは「多数派」と必死にたたかっているプレハーノフは、一九〇四年九月二日に両方の側の勢力はほぼ伯仲している、と公けに声明した（この言明は印刷されている）。

われわれボリシェヴィキは、われわれの側には真のロシア国内の党活動家の大多数がいる、と断言する。われわれは、分裂の主要な原因であり統合への主要な障害になっているのは、第二回大会の諸決定に服従することを拒否し、第三回大会の召集よりも分裂の方をえらんだ、少数派の組織撹乱者的な振舞であると考える。

現在、メンシェヴィキはロシアのいたるところで地方組織の分裂をおこそうとしている。たとえばペテルブルグで

は、彼らはそこの委員会が十一月二十八日にデモンストレーションを組織しようとしたのを妨害した（『フペリョード』第一号を見よ）。いまでは彼らはペテルブルグでは、離脱して別個のグループをつくっており、このグループは「中央委員会直属グループ」と呼ばれて、党地方委員会に対抗している。彼らは数日前にオデッサでも、党の委員会と闘争するために、同じような地方グループ（「中央委員会直属」の）を創設した。党のメンシェヴィキ的中央諸機関は、その誤った立場のために、党の地方活動を撹乱しなければならなかった。なぜなら、これらの中央機関は、それらを選出した党のもろもろの委員会の決定に服従したくなかったからである。

『フペリョード』と新『イスクラ』との原則上の意見の相違点は、旧『イスクラ』と『ラボーチェエ・デーロ』とのあいだにあったものと、本質上同じである。これらの意見の相違をわれわれは重大なものと考えはするが、しかし、自己の見解を、すなわち旧『イスクラ』の見解を完全にまもる可能性があるばあには、これらの意見の相違を、それ自体としては、一つの党内で共同活動するための障害とはみなさないであろう」（前出、第八巻、一〇六―一一〇ページ、傍点およびゴシック体―原文）。

ごらんのように、ここにはロシア社会民主労働党第二回大会の席上で、どのようにしてボリシェヴィキ派とメンシェヴィキ派との分裂が生じたか、両者の対立の根本的理由はどこにあるか、そしてまた、その分裂は（一九〇五年はじめにいたるまで）どのように展開していったかということが、明瞭に述べられている。この説明でおそらくは十分と考えられるが、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの両派の対立・抗争がどのような思想的背景をもっているのかということをよりよくとらえるために、なお、レーニンの『一歩前進、二歩後退（わが党内の危機）』のなかから若干の引用をこころみることにしよう。つぎにかかげる一連の引用は、大会での日和見主義的な翼が明白に形成される

にいたった最初の問題、すなわち、党規約第一条をめぐる闘争の経過を明らかにしているものである。「規約の問題が、われわれのすべてにとってひじょうに大きな意義をもっていたことは、いうまでもない。実際に、『イスクラ』は、最初から文筆上の機関紙として行動しただけでなく、組織上の細胞として行動したのである。第四号の主張（『なにからはじめるべきか？』）のなかで『イスクラ』は、さながら組織計画ともいうべきものをかかげ、また三年のあいだこの計画を系統的に、たゆみなく実行してきた。第二回党大会が、『イスクラ』を中央機関紙として承認したとき、これにかんする決議の趣旨説明の三項目のうち、二項目は、『イスクラ』のほかならぬこの組織計画と、組織上の思想とに、すなわち党の実践活動の指導の仕事におけるその役割と、統合のための活動におけるその指導的役割とに、あてられていた。そこで、まったく当然のこととして、『イスクラ』の活動と党を組織する全事業、党を実際に復活する全事業は、特定の組織上の思想を党全体が承認して、それを正式に確認することなしには、完了したものとみなすことができなかった。この任務をはたすことこそ、党の組織規約のしなければならないことであった。

『イスクラ』が党組織化の基礎におこうと努力した基本的な思想は、本質的には、つぎの二点に帰着する。第一の、中央集権主義の思想は、組織上のあまたの部分的、細部的な問題全体の解決方法を、原則的に規定するものであった。第二の思想――思想上の指導機関である新聞の特殊な役割――は、革命的突撃の最初の作戦基地を国外につくるという条件で、政治的奴隷制の環境のもとにあるほかならぬロシアの社会民主主義的労働運動の一時的な、特殊な必要を考慮したものであった。ただ一つ原則的な思想である第一の思想は、規約全体をつらぬかなければならなかった。場所と行動方法との一時的な事情の生みだす部分的な思想である、第二の思想は、中央集権主義からの外見的な

逸脱に、すなわち、中央機関紙と中央委員会という二つの中央機関をつくるという点に、表現されていた」（前出、第七巻、二二二―二二三ページ、傍点―レーニン）。

「マルトフの草案の第一条。「党の綱領を承認し、党の任務を実現するため党の諸機関（原文どおり！）の統制と指導のもとに積極的に活動するものはすべてロシア社会民主労働党に所属するものとみなされる」。

私の草案の第一条。「党の綱領を承認し、物質的手段によっても、また党組織の一つにみずから参加することによっても党を支持するものは、すべて党員とみなされる」。

大会でマルトフが提案し、大会の採択した定式による第一条。「党の綱領を承認し、物質的手段によって党を支持し、党組織の一つの指導のもとに党に規則的な個人的協力をおこなうものは、すべてロシア社会民主労働党の党員とみなされる」。

この対照によって、マルトフの草案には、まさしくなんの思想もなく、空文句しかないことが、はっきりわかる。党員が党諸機関の統制と指導のもとに活動するということは、わかりきったことで、それ以外ではありえない。こんなことを言うのは、なにも言わないためにしゃべることがすきな人、際限のないおしゃべりと官僚主義的な（すなわち事業にとっては不必要だが、見せびらかすためには必要とおもえる）定式で「規約」を埋めることがすきな人だけである。第一条の思想は、つぎのような問題が提起されたときにはじめて現われてくるのである。すなわち、「党組織のどの一つにも所属しない党員にたいして、党機関は実際にその指導を実現できるか」という問題である。この思想は、同志マルトフの草案のなかには跡かたもない。……」（前出、二二四―二二五ページ、傍点―レーニン）。

「……しかし、どんな小さな意見の相違でも、それをあくまで固執するなら、それを前面におしだすなら、この意見

の相違の根と枝葉とをあらいざらいさがしもとめはじめるなら、大きなものとなりかねない。どんな小さな意見の相違も、それがあるまちがった見解への転換の出発点となるなら、そしてこれらのまちがった見解が、新しい追加的な意見の不一致のために無政府主義的な行動とむすびつき、それが党を分裂させるところまでいくなら、巨大な意義をもつようになりかねないのである。

この場合にも、まさにそういうふうであった。第一条にかんする比較的小さな意見の相違は、いまではひじょうに大きな意義をもつようになった。というのは、まさにこの意見の相違が、少数派の日和見主義的な深慮と無政府主義的な空文句（とくに連盟の大会で、またその後、新『イスクラ』の紙上でも）への転換点となったからである。ほかならぬこの意見の相違が、イスクラ少数派と、反イスクラ派ならびに沼地派との連合の発端となったし、またこの連合は選挙のときまでに最後的に明確な形をとったのである。だから、この連合を理解せずには、中央諸機関の構成の問題で生じた主要な根本的な意見の不一致も、理解できない。第一条にかんするマルトフとアクセリロードの小さな誤りは、われわれの壺にはいった小さなひび割れであった（私が連盟の大会で言ったように）。この壺をかたむすびの紐で（連盟の大会のときヒステリーに近い状態にあったマルトフにそう聞きとれたような、首くくりの縄ではなく）なるべくかたくむすびつけることもできた。また、ひびを大きくし、壺を割ってしまうことに全力を傾けることもできた。熱中したマルトフ派のボイコットや、それに類する無政府主義的な措置のおかげで、まさにこのあとのほうのことがおこったのである。第一条についての意見の相違は、中央諸機関の選挙の問題にあたってすくなからぬ役割を演じた。そして、この問題でマルトフが敗北した結果として、彼は、乱暴なまでに機械的な、言語同断とさえいえる手段（ロシア革命的社会民主主義在外連盟の大会での諸演説）による「原則的な闘争」をやるまでになったのである。

以上のようないろいろの出来事があったので、いまでは第一条の問題は、こうして巨大な意義をもつようになった。そこで、われわれは、この条項の表決のさいに大会で現われた諸グループの性格をも、また、――これとは比較にならないほどいっそう重要なことであるが、――第一条をめぐってあらわれた、またはあらわれはじめた見解のいろいろの色合いの真の性格をも、はっきり理解しなければならない。読者にご存じのいろいろの出来事があったので、いまでは問題はすでにつぎのような形で立てられている。すなわち、アクセリロードが擁護したマルトフの定式化には、私が党大会で述べたように、彼の（あるいは、彼らの）浮動性、ぐらつき、政治的あいまいさが反映していたのか、またプレハーノフが連盟の大会で推測したように、ジョーレス主義と無政府主義とへの彼（または彼ら）の偏向が現われていたのか？　それともまた、プレハーノフが擁護した私の定式化には、中央集権主義のまちがった、官僚主義的な、形式主義的な、ポンパドゥール的な非社会民主主義的な理解が反映していたのか？　日和見主義と無政府主義か、それとも官僚主義と形式主義か？――小さな意見の不一致が大きなものとなったいまでは、問題はこういう形で立てられている。そして、私の定式化にたいする賛否の論拠を本質にふれて討議するさいには、いろいろな事件によってわれわれすべてにおしつけられた――大げさにきこえさえしなければ、歴史的にあたえられた、と私は言いたい――ほかならぬこの問題提起をこそ、念頭におかなければならないのである。

……同志アクセリロードは言った。「われわれは党という概念と組織という概念とを区別しなければならないと、私は考える。ところが、ここでは、この二つの概念が混同されている。この混同は危険である」と。これが私の定式化に反対する第一の論拠である。もっとくわしくこれをしらべてみよう。私が党は組織の総和（だが、たんなる算術的な総和ではなく、複合体）でなければならないというとき、それは、私が党という概念と組織という概念とを「混

同している」ことを意味するであろうか？　もちろん、そうではない。私は、これによって、党は、階級の先進部隊として、できるだけよく組織されたものでなければならない、党は、せめて最小限度にでも組織に服する分子だけを加入させなければならない、という、自分の願望、自分の要求を、まったく明瞭かつ正確にいいあらわしているのである。これに反し、私の論敵は、党に組織された分子と未組織分子とを、指導に従うものと従わないものとを、先進的な人々と矯正の見込のないほどおくれた人々とを――というのは、矯正の見込があるおくれた人々なら、組織にはいれるからである――混同している。この混同こそ、真に危険なものである。同志アクセリロードは、さらに、「厳重に秘密な中央集権的な過去の組織」（「土地と自由」団と「人民の自由」団）を引き合いにだした。これらの組織のまわりには、「組織には所属しないが、なんらかの形で、その組織を援助し、党員とみとめられていた多くの人々が結集していた。……この原則は、社会民主主義組織では、もっと厳重に実行されなければならない」と、彼は言った。ほかならぬここで、われわれは問題の要点の一つに到達したのである。すなわち、「この原則」――、党のどの組織にも所属せず、「なんらかの形で党を援助している」にすぎないものに、党員と名のるのをゆるす原則――は、ほんとうに社会民主主義的なものであろうか、ということである。プレハーノフは、この問題にただひとつ可能な答をあたえた。「アクセリロードが一八七〇年代を引き合いにだすのは正しくない。当時は、よく組織された、みごとに訓練された中央部があり、そのまわりには、中央部のつくった各級の組織があった。そして、これらの組織の外にあったものは、混沌、無政府状態であった。この混沌の構成分子は、党員と名のっていたが、このことは事業の利益にならずに害になった。われわれに必要なのは、七〇年代の無政府状態をまねることではなく、それを避けることである」と。だから、同志アクセリロードが社会民主主義的な原則のようにみせかけたがった「この原則」は、実際には、

無政府主義的な原則なのだ。これを論駁するためには、組織の外部でも統制や指導や訓練が可能であるということを示さなければならず、「混沌の分子」に党員という名称をあたえる必要を示さなければならない。同志マルトフの定式の擁護者たちは、そのどちらをも示さなかったし、また示すはずもなかった。同志アクセリロードは、一例として「自分は社会民主主義者であると考え、そう言明する一教授」をあげた。この例にふくまれる思想をとことんまでつきつめるためには、同志アクセリロードはさらにこう言わなければならなかったはずである。すなわち、組織された社会民主主義者自身は、この教授を社会民主主義者とみとめるか？　と。同志アクセリロードは、この第二問を出さずに、自分の論証を途中で投げだしてしまった。実際、二つに一つである。組織された社会民主主義者が、われわれの問題にしている教授を社会民主主義者とみとめるか、――そのばあいには、なぜ彼らは、教授をあれなりこれなりの社会民主主義組織にいれないのか？　こういうふうにいれられる場合にはじめて、教授の「言明」は、彼の行為に一致し、空文句（教授の言明というものは、あまりにもしばしばこういうものを出ないのであるが）ではなくなるであろう。それとも、組織された社会民主主義者は、教授を社会民主主義者とみとめないか、――その場合には、党員という名誉あり責任ある称号を名のる権利を教授にあたえることは、愚かなことであり、無意味であり、有害である。こうして問題は組織の原則を一貫してつらぬくか、それとも離散状態と無政府状態を聖化するか、に帰着する。……

……同志アクセリロードは、こうつづけて言った。「われわれがレーニンの定式を採用するなら、われわれは、直接に組織に加入させることはできないが、それにもかかわらず党員である一部の人を捨てさってかえりみないことになるだろう」と。同志アクセリロードは、概念を混同していることで私を非難しようとおもったのだが、その概念の混同は、ここで、彼自身のばあいにまったくはっきりあらわれている。彼は、援助するものはみな党員であるという

ことをすでに既定の事柄としている。ところが、まさにこのことをめぐって論争がおこなわれているのであって、私の論敵は、このような解釈が必要であり利益があることをまだこれから証明しなければならないところなのだ。捨てさってかえりみないという、ちょっと見ると恐ろしいこの文句の内容は、いったい、どんなものか？　党組織とみとめられた組織の成員だけを党員とみとめる場合にも、「直接に」どれか一つの党組織に加入することのできない人々は、党組織ではないが、党に同調する組織ではたらくことができるではないか。したがって、仕事から除外し、運動への参加から除外するという意味での、捨ててかえりみないということは、問題にならない。それどころか、真の社会民主主義者から成るわれわれの党組織が強固になればなるほど、また党内にぐらつきと浮動性がすくなくなればなるほど、党をとりまいており、党に指導される労働者大衆の分子にたいする党の影響は、それだけいっそうひろく、多面的に、ゆたかになり、またみのり多いものとなるであろう。実際、労働者階級の先進部隊としての党を、階級全体と混同するのは許されないことではないか。ところがアクセリロードがつぎのように言っているのは、ほかならぬこの混同（一般にわが日和見主義的経済主義の特徴をなす）におちいったものである、――「われわれは、もちろん、まず第一に、党のもっとも積極的な分子の組織、革命家の組織をつくりだすが、しかし、われわれが階級の党であるからには、あまりに積極的でなくとも、意識的にこの党に同調する人々を、党外に残しておかないように考慮しなければならない」と。第一に、社会民主労働党の積極的な分子のなかにはいるのは、革命家の諸組織だけではけっしてなく、党組織としてみとめられた多数の労働者組織も、このなかにはいるであろう。第二に、いったいどういう理由で、またどういう論理によって、われわれが階級の党であるという事実から、党に所属する人々と党に同調する人々とを差別する必要はないという結論が出てくるようなことになったのか？　まったく逆である。まさに意識の程度や

積極性の程度に差があるからこそ、党への近さの程度にも差をつけることが必要なのである。われわれは階級の党である。だから、階級のほとんど全体が（そして、戦時や内乱時代には、完全に階級全体が）、わが党の指導のもとに行動し、できるだけ緊密にわが党に同調しなければならないのである。だが、資本主義のもとでいつかは階級のほとんど全体、あるいは階級の全体がその先進部隊の、その社会民主党の意識性と積極性までたかまることができる、と考えるのは、マニーロフ気質であり、「追随主義」であろう。資本主義のもとでは、労働組合組織（より初歩的な、また未発達な層の意識にとって、より受けいれやすい組織）でさえも、労働者階級のほとんど全体、あるいはその全体を包括することはできないということは、これまで分別のある社会民主主義者のだれひとりとして疑ったことはなかった。先進部隊と、それにひきつけられる全大衆との差異をわすれ、ますます広範な層をこの進んだ水準にたかめる先進部隊の不断の義務を忘れることは、自分をあざむき、われわれの任務の巨大さに目をとじ、これらの任務をせばめることでしかないであろう。党に同調するものと党に所属するものとの差、自覚し積極的なものと援助するものとの差を抹殺することは、まさにこういう目をとじることであり、わすれることである」（前出、二三五―二四〇ページ、傍点―レーニン）。

「『どのストライキ参加者、どのデモ参加者も自分の行動に責任を負って、自分は党員であると言明することができるなら、われわれとしてよろこぶほかはない』。実際そうか？　どのストライキ参加者も自分は党員であると言明する権利をもつべきであろうか？　この命題によって同志マルトフは、社会民主主義をストライキ主義にひくめ、アキモフらの災厄をくりかえすことによって、自分の誤りを一挙に背理にまでもっていってしまった。もし社会民主党がどのストライキをも指導できるなら、われわれはよろこぶほかはない。なぜなら、社会民主党の直接・無条件の義務

は、プロレタリアートの階級闘争のあらゆるあらわれを指導することであるが、ストライキは、この闘争のもっとも深刻で、もっとも強力なあらわれの一つだからである。しかし、このような初歩的な実質上組合主義的なものでしかない闘争形態と、全面的で意識的な社会民主主義的な闘争との同一視をおかすなら、われわれは追随主義者となるであろう。どのストライキ参加者にも、自分は「党員であると言明する」権利をあたえるなら、われわれは、意識的な虚偽を日和見主義に法制化することになるであろう。というのは、この「言明」は、多くのばあい、嘘の言明となるだろうからである」(前出、二四一ページ、傍点—レーニン)。

「同じ演説のなかで同志マルトフは、「私は陰謀組織をおそれはしない」と述べた。しかし——と、彼はつけ加えた——、「私にとっては、陰謀組織は、広範な社会民主労働党がそれをつつんでいるかぎりで、はじめて意味をもつのである」と。正確には、広範な社会民主主義的労働運動がそれをつつんでいるかぎりで、と言うべきであった。そして、こういう形でなら、同志マルトフの命題は、争う余地がないばかりでなく、まったく自明の理でもある。私がこの点に立ちいって述べるのは、そのあとに発言した演説者たちが同志マルトフの自明の理を、レーニンは「党員の総和を陰謀家の総和にかぎろう」とのぞんでいるという当世大流行のきわめて俗悪な論拠[85]に仕立てあげたからにすぎない。微笑を催させるにすぎないこの結論を、同志ポサドフスキーも同志ポポフも引きだした。そして、それをマルティノフやアキモフがとりあげたとき、この結論の真の性格は、すでに完全に明らかになった。それは、ほかならぬ日和見主義的空文句という性格である。……

……社会民主党であるためには、ほかならぬ階級の支持を獲得しなければならない。同志マルトフが考えたように、党が陰謀組織をつつむべきなのではなく、革命的階級が、プロレタリアートが、**陰謀組織をも陰謀的でない組**

織をも包括している党を、つつまなければならないのである」（前出、二四二―二四三ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

（85）トロツキーが、例の大論説のなかで、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの双方にけちをつけて、「秘密の党サークルの組織的独裁」とか、「理論的に同意見の人々の閉鎖的な団体」とか並べたてている（Ⅳの①）のは、七年前の一九〇三年に、彼の親密この上もない戦友であったマルトフ、ポサドフスキー、ポポフらのメンシェヴィキ、および札つきの経済主義者、マルトィノフやアキモフらがさかんにかつぎまわった、この反ボリシェヴィキの俗悪デマの魅力を忘れることができず、あいもかわらず蒸しかえしているということである。

「一言でいえば、同志マルトフの定式は、死文に、空文句にとどまるか、それとも、主として、またはほとんどもっぱら、「ブルジョア的個人主義が骨の髄までしみこんでいて」、組織に所属したがらない「インテリゲンツィア」に役立つか、どちらかである。口先きでは、マルトフの定式は、プロレタリアートの広範な層の利益を擁護しているが、実際には、この定式は、プロレタリア的な規律と組織とをきらうブルジョア・インテリゲンツィアの利益に役立つであろう。現代の資本主義社会における特別の層としてのインテリゲンツィアを全体として特徴づけるものがほかならぬ個人主義であり、規律と組織にたいする無能力であることを、あえて否定するものは一人もないであろう。……とりわけこの点で、この社会層はプロレタリアートにおとるのである。この点に、プロレタリアートが、しばしば痛感させられる、インテリゲンツィアの無気力と浮動性の原因の一つがある。そして、インテリゲンツィアのこの性質は、彼らの通常の生活条件や、ひじょうに多くの点で小ブルジョア的な生存条件に近似している彼らの生計獲得条件（ひとりで、あるいはひじょうに小さな集団でする仕事など）と切りはなせない関連をもっているのである。最後に、同志マルトフの定式のほかならぬ擁護者たちが、教授や中学生の例をもちださなければならなかったことも、偶

然ではない！　第一条にかんする論争では、同志マルトフと同志アクセリロードが考えたように、広範なプロレタリア的闘争の擁護者が極端な陰謀組織の擁護者に反対したのではなくて、ブルジョア・インテリゲンツィア的個人主義の味方が、プロレタリア的な組織と規律の味方と衝突したのである」[86]（前出、二四八―二四九ページ、傍点―レーニン）。

（86）　レーニンは、同じ「規約第一条」と題する一節の中で、「同志マルトフの定式に疑いもなくふくまれている、組織の解体にみちびく恐れのある誤った思想、日和見主義的な議論や『無政府主義的概念』」という説明をかかげ（前出、二五二ページ、傍点―レーニン）、そのうちの「日和見主義的な議論」という言葉に、つぎのような注記を加えている。

「マルトフの定式を基礎づけようと試みるばあいに必ず姿をあらわすこうした議論のひとつは、とくに同志トロツキーのつぎのような文句である。――「日和見主義は規約のあれこれの条項よりも、もっと複雑な原因によってつくりだされる（あるいは、もっと深い原因によって規定される）。――それは、ブルジョア民主主義とプロレタリアートとの相対的な発展水準によってひきおこされる」。……肝腎なことは、規約のいろいろの条項が日和見主義をつくりだすかもしれないという点にあるのではなく、それらの条項の助けによって、日和見主義に対抗する多少とも鋭い武器をきたえあげる点にある。日和見主義の原因が深ければ深いほど、この武器はいっそう鋭くなければならない。だから、**日和見主義に門戸をひらいている定式を、日和見主義には「深い原因」があるということで正当化することは、生粋の追随主義である**。同志トロツキーが同志リーベルに反対したときには、彼は、規約というものが、部分にたいする全体の、おくれた部隊にたいする先進部隊の「組織された不信」であることを、理解していた。ところが、同志トロツキーは、同志リーベルの味方になると、もうこのことを忘れて、われわれがこの不信（日和見主義にたいする不信）を組織するうえの弱さとぐらつきとを、「複雑な原因」や「プロレタリアートの発展水準」などによって正当化さえしはじめたのである。同志トロツキーのもう一つの論拠はこうである。――「なんらかの形で組織されているインテリゲンツィア青年には、党の名簿に自分を記入することはるかにたやすい」と。まさにそのとおりである。だからこそ、インテリゲンツィア的なあいまいさの欠陥をもっているのは、未組織分子でさえが自分は党員であると言明できるようにする定式のほうであって、名簿に「自分を記入する」権利を排除する私の定式ではない。同志トロツキーはこう言っている。もし中央委員会が日和見主義者たちの組織を「みとめない」とすれば、それはただこの人たちの性

格のためであるが、この人たちが政治的な人物として有名になれば、彼らは危険ではなく、全党のボイコットによって彼らを放逐することができる、と。これは、党から放逐する必要のあるばあいについてだけ正しい（それも、半分しか正しくない。なぜなら、組織された党は投票によって放逐するのであって、ボイコットによって放逐するのではないからである）。放逐することが愚かしく、ただ統制することが必要なだけの、もっとはるかにしばしば見られる場合にかんしては、これはまったく正しくない。統制する目的のために、中央委員会は、十分には信頼できずとも活動能力のある組織を――それをためすために、それを正しい道にむけるように試みるために、中央委員会の指導によってその部分的偏向を麻痺させる、等々のために――一定の条件づきでわざと党に加入させることができる。もし党の名簿に「自分を記入する」ことが一般にゆるされてさえいなければ、こういう加入は危険ではない。まちがった見解とまちがった戦術を、公然と、責任ある態度で、統制をうけながら表明させる（そして討議する）ためには、こういう加入は有益なことがしばしばあるだろう。「しかし、法的規定が、事実上の諸関係に合致すべきであるとすれば、同志レーニンの定式化は拒否しなければならない」と、同志トロツキーは言う。しかも、またもや日和見主義者として言う。事実上の諸関係は死んだものではなく、生きていて、発展するものである。法的規定は、その関係の前進的発展に合致することもあろうし、また（この規定がまずければ）退歩または停滞に合致することもあろう。このあとの場合が、すなわち同志マルトフの「場合」なのである」（二五二ページ、傍点レーニン、ゴシック体―山本）。

ブルジョア・インテリゲンツィア的個人主義と日和見主義とのかたまりでしかないマルトフの定式化をなんとか「合理化」しようとして、あれこれわけのわからない空文句を並べたてているこのトロツキーのやり口を、どうかよくみていただきたい。最悪の日和見主義者の戦友が、なんと、「日和見主義は、複雑な原因によって、深い原因によってつくりだされる」などとえらそうに述べたてているが、その「複雑な原因」とか「深い原因」とかについては、ひと言も説明はない。「日和見主義は、ブルジョア民主主義とプロレタリアートとの相対的発展水準によってひきおこされる」!! なんという、こけおどかしの衒学的空文句であろうか！

同じ著書の最後の節のなかで、レーニンがいわば総括として述べているところを、つぎに二つ、引用しておこう。

「わが党の危機の発展を概観すれば、あいたたかう両派の基本的な構成が、小さな例外をのぞいては、いつも同じ

ものだったことが、たやすく知られるであろう。それは、わが党の革命的翼と日和見主義的翼との闘争であった。しかしこの闘争は、このうえもなくいろいろな段階をとおってきた。そして、すでにつみかさねられたおびただしい文献、多数の断片的な指摘、前後の関連から切りはなされた引用句、個々の非難、等々を理解しようとのぞむものはだれでも、これらのそれぞれの段階の特殊性を正確に知る必要がある。

はっきりとたがいに区別されている主要な段階をかぞえあげてみよう。（一）規約第一条にかんする論争。組織の基本原則にかんする純思想的闘争。プレハーノフと私とは少数派である。マルトフとアクセリロードは、日和見主義的な定式を提案して、日和見主義者たちの腕に身を投じる。（二）中央委員の候補者名簿をめぐって「イスクラ」組織の分裂。五人組の場合にはフォーミンかヴァシーリエフか、三人組の場合にはトロツキーかトラヴィンスキーかで分裂する。[84] プレハーノフと私とは過半数をたたかいとる（九対七）が、それは、いくぶんかは、われわれが第一条について少数派となった、まさにそのおかげである。マルトフが日和見主義者たちと連合を結んだことは、組織委員会事件によって呼びおこされた私の危惧を、すべて実際に確証した。（三）規約の細目にかんする論争のつづき。マルトフはまたしても、日和見主義者たちにすくわれる。われわれは、再び少数派となって、中央諸機関内の少数派の権利を主張する。（四）極端な日和見主義者の七人組が大会から脱退する。われわれは多数派になり、選挙で連合派（イスクラ少数派、「沼地」派、反イスクラ派）をやぶる。マルトフとポポフは、われわれの提案した二つの三人組に地位を占めることを拒絶する。（五）補充のことでおこった党大会後の泥仕合。無政府主義的なふるまいと無政府主義的空文句とのばっこ。「少数派」のなかの一貫性と確固さとにもっとも欠けた分子が牛耳をとる。（六）プレハーノフは、分裂を避けるために《kill with kindness》政策にうつる。「少数派」は、中央機関紙編集局と評議会と

をのっとり、全力をあげて中央委員会を攻撃する。ひきつづき泥仕合がすべてをみたす。（七）中央委員会にたいする最初の攻撃は撃退される。泥仕合は、いくらかしずまりだしたかのように見える。党をふかくゆりうごかしている、つぎの二つの純思想問題を比較的冷静に討議する可能性が生まれる。（イ）第二回大会で形づくられて、これまでのいっさいの区分にとってかわった「多数派」と「少数派」へのわが党の区分は、どんな政治的意義をもち、またその原因はなんであるか？　（ロ）組織問題にかんする新『イスクラ』の新しい立場は、どんな原則的意義をもつか？」（前出、第七巻、三七八―三七九ページ）。

(84)　フォーミンとは少数派の指導グループに属するクロホマールの仮名、ヴァシーリェフとはボリシェヴィクのレングニクの仮名、トラヴィンスキーとはすぐれたボリシェヴィク、クルジジャノフスキーの仮名である。ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」を組織することからはじめて、以来ずっとレーニンとともに革命闘争を堅持してきたクルジジャノフスキーにたいして、トロツキーの名が挙げられているのは、もちろん、少数派によるものでなければならない。この辺にも、トロツキーとマルトフとの「腐れ縁」の根拠のひとつがみられるようである。

「わが党大会は、ロシアの革命運動の全歴史に前例のない、独特の現象であった。秘密の革命党は、はじめて地下のくらやみから白日のもとに現われ、わが党内闘争の全経過と全結果とを、また綱領、戦術、組織の問題にかんしてわが党とその多少とも目ぼしい各部分との全貌を、万人に示すことに成功したのである。……この疾風は、いっさいのサークル的な利害、感情、伝統の残存物をひとつのこらずはきさってしまい……――それをはきさったのはすばらしいことだ！――ここにはじめて、真の党機関をつくりだした。

だが名のることと、実際にそうであることとは、別である。原則的に党のためにサークル根性を犠牲にすることと、自分自身のサークルを放棄することとは、別である。……古いこりかたまったサークル根性は、まだ若い党性を圧倒

した。潰走した党の日和見主義的翼は、アキモフという偶然の獲物の増援をうけて、革命的翼を圧倒する――もちろん一時的に――にいたった。

その結果として現われたのが、新『イスクラ』であった。新『イスクラ』は、その編集局員たちが党大会で犯した誤りを、さらに発展させ深めざるをえなかった。旧イスクラは、革命闘争の真理をおしえた。新『イスクラ』は譲歩と仲良しづきあいという処世哲学をおしえている。旧『イスクラ』は、戦闘的正統派の機関紙であった。新『イスクラ』は、われわれに日和見主義――主として組織問題において――のぶりかえしを饗応する。**旧『イスクラ』は、ロシアの日和見主義者からも西ヨーロッパの日和見主義者からも、名誉ある憎悪をかちえた。**(85) 新『イスクラ』は「賢くなった」、そして極端な日和見主義者たちからあびせかけられている讃辞をまもなく恥ずかしがらないようになろう。旧『イスクラ』は、ひたむきに自分の目的にむかってすすんだ。それには言行の不一致はなかった。新『イスクラ』にあっては、その立場の内的虚偽が、不可避的に――だれかれの意志や意識にさえもかかわりなく――政治的な偽善を生みださざるをえない。それは、党性にたいするサークル根性の勝利をおおいかくすために、サークル根性反対を叫んでいる。それは、いくぶんでも組織された、いくぶんでも党らしいものにおいて、少数が多数に服従すること以外にも、分裂を避けるなにか他の手段が考えられるかのように、パリサイ人式に分裂を非難している。それは、革命的な世論を考慮する必要があると声明し、アキモフらの讃辞のことはつつみかくしながら、党の革命的翼に属する諸委員会にかんするくだらない陰ぐちを仕事としている。なんという恥ずかしいことだろう！　なんと彼らは、わが旧『イスクラ』を辱かしめたことであろう！」(前出、三八一―三八二ページ、ゴシック体―山本)。

(85) 「西ヨーロッパの日和見主義者」ではなく、まことにすぐれた革命的社会民主主義者として世に知られたかのローザ・ル

クセンブルグでさえも、マルトフ、アクセリロード、トロツキーたちのふりまわす空文句にいかにたぶらかされ、そのために、ロシア社会民主労働党第二回大会での党内闘争についていかに完全に逆立ちした考え方しかもてなかったかということは、きわめて注目に値する事実といわなければならない。彼女は、『ノイエ・ツァイト』一九〇四年第四二、第四三号に論文、『ロシア社会民主党の組織問題』を書いて、レーニンの著書『一歩前進、二歩後退』を批判しているが、その内容はことごとくまちがった「事実認識」にもとづく一方的やっつけに終っているのである。レーニンは、『一歩前進、二歩後退（エヌ・レーニンのローザ・ルクセンブルグへの回答）』と題する論文を書いて、ローザの一方的やっつけにたいして徹底的な反批判を加えているが、このレーニンの論文を『ノイエ・ツァイト』に掲載してほしいとのレーニンの要求は、カウツキーらによってにべもなく拒否されたのである。ローザの批判がいかにひどいものかということを示すために、レーニンがその反駁論文のなかであげているローザの誤りとでたらめのやっつけとを、以下箇条書きにしてかかげてみよう（括孤内ページ数は、全集第四版第七巻の中での該当ページを示す）。

(イ) ローザは、レーニンの著書に「なにごとをもかえりみない中央集権主義」の傾向がはっきりとあざやかに現われている、と言っている。――これは事実に反する。レーニンが擁護しているのは、どの党組織のどの体系にもあてはまる初歩的な諸命題にすぎない（四三九ページ）。

(ロ) ローザは、「レーニンの理解するところによれば、中央委員会には党のすべての地方委員会を組織する全権があたえられる」と、言っている。――これもまったく事実に反する。レーニンの意見は、その党組織規約草案によって、記録にもとづいて証明することができる。この草案は、地方委員会を組織する権利については一言も述べていない。党規約を作成するために党大会で選出された小委員会が、この権利を規約のなかに挿入し、そして党大会が小委員会の草案を確認したのである。この小委員会には少数派の代表が三名も選出されていた。ローザは、ほかの事柄と混同してこの事実無根の主張をつくりあげたものである（四三九―四四〇ページ）。

(ハ) ローザは、レーニンの意見では「中央委員会が党の唯一の積極的中核である」と、言っている。――これもまったく事実に反する。少数派こそ、レーニンが中央委員会の独立性、自主性を十分に主張しないといって、レーニンを非難しているのである（四四〇ページ）。

(ニ) ローザは、ロシア社会民主党内には単一の党の必要性にたいする疑惑はなんら存在していない、全論争は中央集権化の

度合いの大小の問題に集中されている、と言っている。――これもまったく事実に反する。論争は主として、中央委員会と中央機関紙は党大会の多数派の傾向を代表すべきであるか、それとも代表すべきでないか、ということについておこなわれたのである。ローザは、「奴隷的な従順さ」とか「盲目的服従」とかいったことに反対して熱弁をふるっているが、党機関と名のる中央諸機関内で、党大会の少数派が優努を占めるというようなことを正常なことと考えるかどうかについては、いっさい口をつぐんでいる（四四〇―四四一ページ）。

(ホ) ローザは、ロシアには大きな、極端に中央集権化された労働者党を組織するすべての前提がすでにそなわっているという思想をレーニンがもっているように、言っている。――またしてもこれは事実の誤りである。レーニンは、どこででもこうした思想を擁護していないばかりか、すこしも述べてさえいない。レーニンは、党大会の諸決定が承認されるためのすべての前提はすでに存在している、ということを強調したのである（四四一ページ）。

(ヘ) ローザは、レーニンが工場の教育的意義を讃美している、と言っている。――これもまた事実に反する。レーニンが党を工場のようなものと考えていると主張したのは、レーニンの論敵なのである。レーニンは、彼をしたたか嘲笑し、彼自身の言葉によって、彼が工場の規律の二つのちがった面を混同していることを証明しているのであって、このわらうべき混同はローザもやっているのである！（四四一―四四二ページ）。

(ト) ローザは、レーニンが、革命的社会民主主義者とは階級意識をもった労働者の組織と結びついたジャコバン派である、と規定することによって、レーニンの論敵のだれにもできないほど機智にとんだやり方で自分の見地を特徴づけている、と言っている。――これもまったく事実に反する。ジャコバン主義を云々したのは、レーニンではなく、ペ・アクセリロードである。アクセリロードが最初に、わが党のグループ分けをフランス大革命時代のグループ分けと比較したのである。レーニンは、こうした比較は、こんにちの社会民主主義の革命派と日和見主義派とへの区分が、山獄派とジロンド派への区分に、ある程度対応しているという意味でのみ許される、と述べたにすぎない。旧『イスクラ』は、まさにこうした区分をみとめることによって、党内の日和見主義的翼、つまり『ラボーチェエ・デーロ』の傾向とたたかってきた。ローザは、こっけいにも、十八世紀と二十世紀の二つの革命的流派の間に相関関係があるということと、これらの流派そのものを同一視することとを、混同しているのである（四四二ページ）。

(チ) ローザは、ロシア社会民主労働党のいろいろな傾向を実際に分析することをまったくしていない。レーニンは、党大会

の議事録にもとづいてこういう分析をおこなうことにその著書の大半をあてているのだが、ローザは、その党大会をまったく無視している。党の真の土台を据えた党大会を無視するとは、おどろくべき無鉄砲さである。レーニンの論敵も、ローザも、事実の基礎を欠いた主張をならべたてるだけで、この無鉄砲さをあえてやってのけているのである（四四二ページ）。

(リ) ローザは、まったくの空文句をくりかえすばかりで、党内闘争の具体的事実を尊大にも無視し、まじめに論ずるわけにいかないような問題について寛大にも熱弁をふるっている。ローザは、組織規約のあれこれの定式は日和見主義にむけられた多少とも鋭い闘争の武器になりうるという、レーニンの言葉を引用しているが、その定式化が具体的にどのようなものであったかについては一言も述べず、どういう論戦がおこなわれ、レーニンがどういう命題をおしだしたかというようなことは、いっさいふれてない。そのかわりに、ローザは、まったく愚にもつかない一般的な御託宣を並べて結論にかえている（四四三ページ）。

(ヌ) 第二回党大会で、党の形式上の統合が、そして、「多数派」と「少数派」とへの党の分裂がおこなわれたが、この分裂の理由は、党大会で生じた闘争のくわしい分析だけが、ただこの分析だけが、説明できるのである。ところが、ローザをふくめて少数派の味方は、ひとりのこらず、この分析をまったく用心ぶかく避けているのである（四四五ページ）。

(ル) レーニンは、その著書のなかで、党大会でおこなわれたあらゆる表決における各グループ（イスクラ多数派、イスクラ少数派、中間（「沼地」）派、反イスクラ派）の役割を分析し、あらゆる問題（綱領、戦術、組織上の）で、党大会は、イスクラ派の反イスクラ派にたいする闘争の舞台であったこと、そのなかで「沼地」派が種々の動揺を示したことを、立証している、だれであろうと、ほんのすこしでも党の歴史に通じているものには、それ以外でありえなかったことが、はっきりしているはずである。ところが、ローザをふくめて、少数派の味方は、この闘争にはつつしみぶかくまったく眼を閉じている。それというのも、この闘争こそ、少数派の現在の政治的立場が完全にせものであることをすっかり明らかにしてしまうからである（四四六ページ）。

(ヲ) 反イスクラ派（アキモフ、ブルケール、マルトィノフ、ブンド）は、旧『イスクラ』の傾向を承認することに反対し、旧来の私的組織を擁護し、それらを党に従属させることに反対し、中央集権主義の趣旨で作成された組織規約にたいして闘争し、そのさいイスクラ派全員を非難して、イスクラ派は「組織された不信」、「例外法」その他のぞっとするようなことを実施しようとしている、と言った。イスクラ派全員は当然にも、一人ももれなく、当時これを嘲笑したものである。ところが、な

んと、ローザは、こうしたでたらめの作り話を真にうけているのである！（四四六ページ）。

(7) 党内闘争について具体的事実をすこしも分析せず、反イスクラ派や少数派のデマをうのみにして、「超中央集権主義」だとか、漸進的中央集権化が必要だ、などといったローザの意見は、具体的・実践的には第二回党大会にたいするまぎれもない嘲笑であり、また、抽象的・理論的にはマルクス主義の明白な卑俗化であり、マルクスの真の弁証法の低劣きわまる歪曲でしかない（四四九ページ）。

ごらんのように、ここにあげた十三の誤りのうちのどれをとっても、それがマルクス主義の初歩的・基本的原則にたいする恥ずべき背反であり、したがって、マルクス主義的革命家としての資質の完全な欠格を示すものでないものはない。なるほどローザは、シャイデマン、ノスケあるいはカウツキーらの裏切者にくらべれば、はるか格段にすぐれたマルクス主義的闘士であった。彼女がレーニンによりに鷲にたとえられたのはけっして故なきにあらず、である。だが、それだからといって、彼女の闘争のすべてが正しかったということは、けっしてできない。それどころか、理論的にも実践的にも、彼女は致命的な誤りと欠陥とをすくなからずおかしたのであって、このことは、右にあげた十三の誤りを一読するだけでもうなずかれるところである。煽動政治屋トロツキーのエピゴーネンにふさわしく知りもしない名士をかついで無邪気なインテリ学生たちをひきまわしている手合が、最近になってローザの名をかつぎだし、レーニンを上廻る革命家だとして売り出しにつとめているようであるが、少数派のデマを信じきっているローザを、少数派の「親方」のひとりであるトロツキーのそのまた尻尾どもがかつぎだすのは、けだし、理の当然というべきであろう。また、ドイツ社会民主党内の日和見主義分子が『ノイエ・ツァイト』のまわりに巣くっており、これらの手合がロシアの少数派＝日和見主義者たちと気脈を通じていたものであること、抜け目のないトロツキーがこの強力な手づるを最大限に活用してレーニンの声望になんとかケチをつけようと狂奔したものであること、――こうした歴史的事実のもっている重みというものを、われわれはとくと玩味する必要があろう。

では、トロツキーは、第二回党大会でのボリシェヴィキとメンシェヴィキとの対抗・分裂を、どのように説明しているか？　一九一〇年『ノイエ・ツァイト』に発表した大論説では、「ロシア社会民主党内部の分裂が生みだしたいずれの分派も、まず第一に、プロレタリアートの階級運動へのマルクス主義的インテリゲンツィアの適応によって生じたもの」（Ⅰの

⑧）という説明をかかげているが、これは、社会民主主義派にたいするブルジョア自由主義派の非難をそのまま真似たものにすぎない。彼はまた、そのⅡでは、「この分裂の基礎は、組織問題における、すなわち本来大衆運動にたいする党組織の関係の問題における、把握の相違であった。これら二つの路線は、たがいにきわめて尖鋭にたたかいあったが、しかし事実上の差異はもともとまったく些細なものであった」（①および②）という説明をしているが、これがことごとく的はずれのたわごとでしかないことは、いまさらいうまでもない。一九一〇年には両派もろとも槍玉にあげてトロツキー派だけを売り出すために、例の大論説のなかで、両派とも「その差異は些細なもの」とてもなく片付けているが、その六年まえには、メンシェヴィキの有力な旗頭としてボリシェヴィキだけを槍玉にあげて「綱領的」パンフレット＝『われわれの政治的任務』を書き、そのなかで「旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある」と言明しているのである。なんと、でまかせとでまかせとの美事な鉢あわせではあるまいか！　この場当り式ペテン師が、けんめいに飾りたてた自伝、『わが生涯』（一九二九年）のなかでは、日和見主義派の親方であるマルトフに加担した歴史的事実をぬりつぶそうとして、どんなにとりつくろった音をあげているかということを、ここでとくと鑑賞することにしよう。

（86）　このパンフレットの内容や、このパンフレットを書いた当時のトロツキーの言動が、およそどんなものであったかということも、行論でふれることにしよう。さきにローザの「非難」の客観的な意味を考察したときも痛感されたことであるが、やはり頼るべきは歴史的事実である。

「どのようにして私は、大会で「軟派(!!)」に属するようになったのか？　イスクラ編集部員のなかで、私がもっとも親密な関係にあったのは、マルトフ、ザスーリッチおよびアクセリロードであった。彼らの私にあたえた影響力は、疑うべくもなかった。大会以前にも、編集部内には、さまざまなニュアンスの相違はあったが、鋭いちがいはなかった。私はプレハーノフからいちばん遠ざかっていたが、それは、実にささいな最初のやりあい以来、彼が私につよい嫌悪をもっていたからである。レーニンの私にたい

する態度は申し分なく親切であった。だがいまや、私の意見では単一の単位を成していてイスクラというひとを奮起させる名をもっている一個の団体である編集委員会を攻撃していたのは、私の眼のなかでは、レーニンであった(!!)。編集委員会内の分裂という考え(!!)は、私には冒瀆以外のなにものでもなかった。

革命的中央集権主義(!!)は、苛酷な、のっぴきならぬ過大の犠牲を要する原則である。それは、しばしば、以前の同じ仲間の個々のメンバーあるいはグループ全体にたいする関係で、まったく無慈悲なみせかけをとるものである。「非妥協的」および「無慈悲な」という言葉をレーニンが好んで用いたということは、けっして意味のないことではない。このような対人的無慈悲さを正当化することができるのは、ただある一定の目的をめざしてのきわめて熱情にあふれた革命的な奮闘努力——下劣なこと、または個人的なことから完全に自由な努力——だけである。一九〇三年には、論争の全要点は、編集委員会からアクセリロードとザスーリッチを除こうというレーニンの熱望にまさしくあった(!!)。彼ら二人にたいする私の態度は、尊敬にみちたものであったが、また個人的な愛情の要素もあった。レーニンもまた、彼らが過去になしとげたことについては高く評価していた。しかし彼は、二人が未来にとって障害になりつつあると信じた(!!)。これによって、彼は、二人をその指導的地位から罷免しなければならないと、結論するにいたった(!!)。私はそれに同意することはできなかった(!!)。やっと組織された党の入口に立っている古参の人々をこのように無慈悲に切りすてるということにたいして、私の全存在が抗議するようにおもえた。第二回党大会でレーニンとの決裂に事実導いたのは、彼の態度にたいする私の憤激(!!)であった。彼の振舞は、私には許すべからざるもの、おそろしいもの、言語同断なものに見えた。だがしかし、それは組織の観点からみれば(!?)正当なものであり、また必要なものであった。準備段階にそのままふみとどまっている古参者との分離は、どうあろうと、避けることはできなかった。レーニンは、それを他のだれよりも先きに理解した。彼は、プレハーノフを、ザスーリッチとアクセリロードからひきはすなことで、彼を留めようとこころみた(!!)。しかし、この努力も、のちの諸事件がまもなく示したように、まったくむだであった。

私のレーニンとの決裂は、いわば「道義的」な理由(!!)、または個人的理由とさえ見られるもの(!!)から生じた。しかし、それはたんに表面だけであった。根底は、その分離は政治的性質のものであり、それが組織的方法の領域において自身をあらわしたにすぎない。私は、自分を中央集権主義者だと考えていた。しかし当時私が、旧秩序にたいする戦争のなかで幾百万の民衆を指導するために、どんなに強烈で専断的な中央集権主義(!!)が革命的政党に必要であるかということを十分には理解していなかったということは、まったく疑いをいれない。私の少年時代は、オデッサでは、他よりも五年もながくつづいた反動の陰鬱な雰囲気のなか

で過された。レーニンの青春時代は、「人民の意志」派の時代にまでさかのぼる。私より数年おくれてやってきた人は、新しい政治的激動によって影響をうけた環境のうちに育てられた。一九〇三年のロンドンの党大会のときには、革命は、私にはまだ多分に理論的抽象(!!)であった。独立しては、私はまだ、明瞭な革命的概念からの論理的帰結(!!)としてレーニンの中央集権主義(!!)をみることはできなかった。独立して問題を考え、それから必要な結論のすべてをひきだそうという欲求は、つねに私のもっとも熱烈な知的要求となっていた(!!)。

大会で燃えあがった衝突の重大さは、まだきわめて初期の原則の衝突(!!)ということを別にすれば、レーニンの身長と重要性を認めることに、より古参の者たちが失敗したことによってもひきおこされたのである(!!)……。

だが、レーニンは勇気をもっていた(!!)。彼の必要としたことのすべて(!!)は、古参の者たちが、明らかに接近しつつある革命のなかでプロレタリアートの前衛の戦闘組織の直接の指導権をにぎることができないということを、確信することであった(!!)。古参の者たち――それも彼らだけではないが――は、彼らの判断においてまちがっていた(!!)。レーニンは、たんに注目すべき党活動家であるだけではなく、一個の指導者であった。彼は、彼独自の目的にむかって彼の存在の全素質をしたがわせる一人の男であり、先輩たちと肩をならべて彼らよりもずっと強力かつ自身必要であると確信したときには、決定的に自身が指導者であることをはっきり覚った人間であった(!!)。イスクラの旗を支持するグループのなかで共通な、まだ漠然としたムード(!!)のただ中にあって、レーニンひとりは、きっぱりと、あらゆるきびしい課題、その残酷な闘争と数えきれない犠牲をもった「明日」(!!)を、直視していたのである。

大会では、レーニンはプレハーノフを、ほんの一時とはいえ、味方に獲得した。それと同時に、彼はマルトフを失った(!!)が、この喪失は永久にであった。プレハーノフは、この大会でなにかをあきらかに感じとっていた(!!)。すくなくともその時、レーニンについての議論のなかで、アクセリロードにこういった、――「ああいう材料からロベスピエールたちはつくられるんだ」と。……。

メンシェヴィキの首領であるマルトフは、革命運動のもっとも悲劇的人物の一人(!!)として数えられなければならない。才能の豊かな著述家、創意に富んだ政治家、洞察力ある思想家であるマルトフ(!!)は、彼がその首領となった知的運動よりはるかに高いところに立っていた(!!)。しかし、彼の思想は勇気を欠いていたし、彼の洞察力は意志を欠いていた(!!)。完全な頑固さもまったく代用にならなかった。事件にたいするマルトフの最初の反応は、つねに革命的な思想傾向を示していた(!!)が、しかしすぐあと

で、生き生きした意志の支えを欠いた彼の思想は、衰えてしまった(!!)。私の彼にたいする友情は、接近しつつある革命によって促進された最初の重大な諸事件という試練のあとまでは、つづかなかった(!!)。

だが、それについて私がどう言おうと、第二回党大会は、私の人生における画期的な事件であった。それが私をレーニンからかなりの年数のあいだひきはなしたという理由(!!)によるだけであったとしても。今日、私が過去をふりかえるとき、私は心残りはまったくない(!!)。私は他の多くの者たちよりずっとおそくレーニンのもとに帰った(!!)。しかし、私は、革命や反革命や帝国主義戦争の経験をくぐり、よく考えたのちに、自分自身のやり方でもどったのである(!!)。その結果(!!)、私は、師匠の生存中はつねに適切なときとはかぎらず、師の言葉や身振りをくりかえしており、彼の死後は無力なエピゴーネンで敵意ある勢力の手中にある無意識の道具であることがわかった彼の「弟子ども」よりも、ずっとしっかりと(!!)、またまじめに(!!)かえったのである」(Ibid. P. 161—164. 傍点—トロツキー、ゴシック体および(!!)—山本)。

読者諸君、彼トロツキーが一九二九年になってことさら著わした自伝のなかのこれらの文章を、どうかとくとお読みいただきたい。彼は、煽動政治屋にふさわしく、自分が他の「弟子ども」にくらべてずっとレーニンに近いものだということをくりかえし書きたてているが、ここに述べている「事実」は、ひとつのこらず、レーニンが『一歩前進、二歩後退』のなかで説明している事実とくいちがい、いずれもそれをふみにじるものばかりである。

(イ) 第一に、トロツキーは、規約第一条についての意見の衝突が、実に「ブルジョア・インテリゲンツィア的個人主義の味方にたいする、プロレタリア的な組織と規律の味方との衝突である」(前出、二四九ページ)という明確なレーニンの指摘を、一九二九年になっても、ふみにじっているのである。

(ロ) 中央機関紙編集局員を三人にするという案を、「革命的中央集権主義」(!?)が生んだ「過大な犠牲」だとして、レーニンのアクセリロードとザスーリッチを除こうという魂胆から出たことだと言いふらしているのは、まったく卑劣な中傷でしかない。これはレーニンの著書の中のつぎの明白な説明に下劣にも泥をぬるものでしかない。

「二つの三人組を選挙する案が明らかに予定していたことは、（一）編集局の刷新、（二）党機関には不適当なサークル根性の若干の特徴を編集局からとりのぞくこと、最後に（三）文筆家から成る合議機関の「神政的」特徴をとりのぞくこと（三人組を拡大する問題の解決に、すぐれた実践家を参加させることによってとりのぞくこと）であった。編集局員の全員が知っていたこの案は、あきらかに、三年間の活動の経験にもとづいたものであり、われわれが実行している革命的組織の諸原則に完全に合致していた」（前出、二八五―二八六ページ、傍点―レーニン）。

「三人組案は、大会のそもそものはじめから、また大会の前からさえ代議員たちに知られており、したがってこの案は大会での出来事や論争とはかかわりのない考慮と材料から出発したものだという、多数派の数多くの指摘を、少数派は論駁しなかった（また論駁しようともしなかった）。少数派は、六人組を主張するにあたって、俗物的な考慮という、原則的に誤った、許しえない立場をとった。少数派は、役員選挙にたいする党的見地をすっかり忘れたことをさらけだし、各役員候補者の評価や、その候補者がその職務に適しているか適してしないかの評価には、ふれることすらしなかった。少数派は悪名高い調和を言いたて、まるでだれかが「殺されかかっている」かのように、「涙をながし」、「悲嘆にくれながら」、問題の本質にふれた審議を回避した。少数派は、「他人の内心に立ちいり」、選挙の「犯罪性」について泣きわめき、またそれと同様な許しえないやり方[87]に訴えるまでになった。「神経のたかぶり」にうごかされて、そういうことまでやるようになった。俗物根性と党性との闘争、最悪の「人身攻撃」と政治的考慮との闘争、あさましい言い分と革命的責務の基本的な観念との闘争――これこそが、わが党大会の第三十回会議でおこなわれた六人組か三人組かをめぐる闘争の本質であった」（前出、二九一―二九二ページ、傍点―レーニン）。

(87)　「それと同様な許しえない、あさましいやり方」のお手本をひとつ、お目にかけよう。――「大会は、編集局を改編する

道徳的な権利も政治的な権利ももたない」（トロツキー）、「これは、あまりにもデリケートな問題である」（トロツキー）。

(ハ) 大会における指導的人物のあいだの敵対または提携の理由としてトロツキーがあげるのは、典型的俗物にふさわしく、個人的な好き嫌い、親密さと疎遠である。原則的立場の相違を見失って、ひたすらにこうした愚劣な個人的感情を重大視するこの卑俗な見地が明示しているのは、彼トロツキーが、マルトフと完全に同じタイプの人間、つまりサークル根性と小ブル的名誉欲が骨の髄までしみこんでいる無政府主義的個人主義者であり、経済主義と修正主義と日和見主義とのごたまぜからできあがっている「トゥーシノの渡り者」でしかない、ということである。

(ニ) ここでは、トロツキーは、親方マルトフからすぐに離れたようなことを書いているが、それは実に、体裁のよい調停主義者として、メンシェヴィキと解党派の尻おしをし、レーニンのボリシェヴィキ派を思うさまやっつけるために、「独立」しただけのことである。これは、一九一〇年の大論説を読んでも、またのちほど引用する一九一四年の彼の手紙の内容をみても、寸分疑いをいれない。つまり、彼は十年余にわたって、日和見主義、修正主義、解党主義を熱烈に擁護し、レーニンのボリシェヴィキ派をば執拗に攻撃しつづけてきたのである。この「トゥーシノの渡り者」が、たとえどんなに「レーニンにもっとも近い弟子」だと自称しようとも、歴史的事実を多少とも知っている者で、この見えすいたまやかしにすこしでも耳をかす者がひとりでもあろうか。ところが、鉄面皮このうえもないこの政治的ペテン師は、後代の無邪気な小ブル的インテリたちの不勉強と無思想をあてこんで、レーニンの『一歩前進、二歩後退』の内容にたいしてはじめからおわりまで下劣な唾をはきかけ、これをねじまげたでまかせの文章を精力的に創作することによって、自分こそは他の「雑多の、不忠実な弟子」どもとはくらべものにならないほど「しっかりと、またまじめに」（!!）レーニンのもとにかえったものだと、宣伝してまわっているのである！（一九七二・二・九）